資料紹介

ある歴史家の自画像

塚本学との対話

Self Portrait of a Historian: A Dialogue with TSUKAMOTO Manabu

KOIKE Jun'ichi

小池淳一

Ⅰ　解題

1）はじめに

本稿は塚本学先生（1927―2013，以下，本意ではないが敬称を省略する）と筆者との対話の記録である。筆者が 2003 年 4 月に国立歴史民俗博物館（以下，歴博）に転任し，1992 年以来，久しぶりに日常的に交流するようになった際に，塚本のライフヒストリーの作成を思い立った。了承を得て，歴博の研究室において，筆者の時系列をやや意識した質問に沿った回顧談を比較的自由に話してもらい，録音することとした。その録音を文字に起こし，一部は塚本のチェックを受けて蓄積したものがここに紹介する資料である。

本資料は一人語りではなく，筆者という聞き手（質問者）が関わり，聞き手の興味関心，志向に一定程度規定されながら，自伝めいたおしゃべりをしてもらった，というものである。広い意味でのインタビューということもできるだろう。聞き手としては戦後歴史学，なかでも社会史研究の担い手であった塚本がどのように自己形成をし，歴史家となっていったのか，個人の内的な動機からとらえてみたい，という問題意識があった。

こうした個人史を叙述する際に，基本となるのは個人に関する文字資料，いわゆる書き物である場合が多いが，それは日常的に文字を駆使し，またその資料が一定の社会的な意味を持っていることが前提となる。しかし，幼年から青年に至る時期にはそうした社会的な意義が全くないわけではないものの，個人的なものが多く，それらは当人が強く希望するのでなければ，公にすべきものではないだろう。そうした時期の資料は，当人の責任と同等かそれ以上に当人の生まれた家庭環境や年上の家族に規定されている場合も多い。この時期の資料として公的な検討に耐えうるのは当人の記憶に基づく回顧であり，それが当人が容認した場合に限られる，といえるだろう。ここで紹介する文字列はそうした条件を満たしていると考えられる。

以下に示す資料（談話記録）は，幼年期の最も古い記憶から東京大学文学部（旧制）に入学するまでの塚本の 2003 年時点での回顧である。文字化した上で，一部の固有名詞などは，前述したように塚本自身に確認をしてもらっている。さらに個人的な情報に言及しており，話の大筋に影響が

少ないと思われる部分については筆者の責任において削除をおこなっている。それ以外は塚本の言い間違い，言いよどみ，話し方のランダムさなどについては修正を加えていない。理解を助けるために筆者が必要と感じた部分に補筆をしているが，それは（　）で括って示した。時系列で生い立ちを語ってもらいたい，という希望はあらかじめ伝えてあったが，特に関連する資料―写真や履歴書など―を用意してもらうこともなく，歴博に来て用を足すついでに，やや緊張しながらも思い出すままに語ってもらったという体の談話であるという位置づけが適当かと思われる。

2）塚本学という人物

塚本の生涯と業績とを確認するために，筆者が『日本歴史』編集部の依頼によって執筆し，良子夫人の確認を得て『日本歴史』2013年8月号（第783号）に掲載された訃報を転記しておく。

> 塚本学氏の訃　国立歴史民俗博物館名誉教授塚本学（つかもと・まなぶ）氏は，二〇一三年四月一二日に死去された。享年八六. 三月に高熱が出て入院加療中ではあったが，快方に向かい退院の相談をしているなかでの急逝であった。氏は一九二七年一月十四日，福岡市で熊沢尚文の次男に生まれ，出生前からの約束で父方縁家の塚本家の養嗣子となった。同家は幕末維新期の科学官僚で改暦などに携わった塚本明毅の出た家で，氏の最後となった著書はその評伝（二〇一二年，ミネルヴァ書房）である。旧制福岡高校を経て一九五〇年東京大学文学部を卒業。卒業論文は古代史であった。明治用水史誌の編纂主任として地方史研究を開始し，愛知県公立高校の教諭を経て，一九七〇年，信州大学文学部に転じた。さらに一九八三年，国立歴史民俗博物館に転じ，一九九二年定年退官。著書は『地方文人』（一九七七年，教育社歴史新書）にはじまり，日本の社会史研究の名著とされる『生類をめぐる政治―元禄のフォークロア』（一九八三年，平凡社選書，平凡社ライブラリーを経て講談社学術文庫）や『江戸のあかり―ナタネ油の旅と都市の夜』（一九九〇年，岩波書店），『都会と田舎―日本文化外史』（一九九一年，平凡社選書），『江戸時代人と動物』（一九九五年，日本エディタースクール出版部）など多数。なかでも『生きることの近世史―人命環境の歴史から』（二〇〇一年，平凡社選書）は氏の構想した一種の通史と述懐されていた。戦後の地方史研究から日本史というよりも日本列島上の人類史という視点で，動植物や虫と人間との関わりを探り，生活知識の継承を多角的に考究した。信州大学等で多くの俊秀を育て，定年退官後は，千葉県内の古文書教室の講師として生涯を通じて歴史に興味を持つ人びとととともに学びつづけた。ユニークな視点と独特の文体，また歴史学にとどまらない広い見識から提示された著作の数々は今後も広義の歴史研究の導きの灯であり続けるであろう。（小池淳一寄[1]）

歴史家としての塚本の生涯を略述すると以上のようになるが，本資料で語られるのは誕生から大学入学までの期間である。インタビューは2003年4月22日，5月6日，5月16日に行なっている。

3）資料の位置づけと意義

ここに提示する資料は塚本のライフヒストリーの早い時期に関わるものである。最初に述べたよ

うに，誕生から大学入学という幼年期から青春前期とでもいえるような，人生のなかでも比較的，社会的な資料が少ない時期のものである。筆者は民俗学の立場で，個人の発話や回想が，民俗事象の伝承の重要な構成要素であり，歴史と言いうるものに展開する可能性を意識してきた[(2)]。その視点は人文社会科学全体におけるライフヒストリーアプローチと重なっている。

隣接する社会学におけるライフヒストリー研究は豊かな蓄積があるが，筆者が参照の必要性を感じるのは社会学の佐藤健二による，個人というフィールドへの自覚，生活概念を媒介させての私的領域への接近，口述資料の持つ特性という指摘である[(3)]。また人類学における個人への着目という点では前山隆の person 概念[(4)]との接続が可能であると現時点では考えている。

さらに聞き取りから歴史を構成していく際の聞き手の問題としては歴史学の大門正克が提起する「語る歴史，聞く歴史[(5)]」という主張に込められたある種の構えを意識している。これは資料が紡ぎ出された時点ではなく，それをテキスト化し，共有をめざす現時点での見通しであるが，口頭での回顧的な表現が言語表現だけに限定されない，という目配りと，語る側だけではなく，聞く側の関与を積極的に評価するという点において共振するところがある。

本資料を用いての解釈と聞き手でもあった筆者の作品の構築は，この資料が本稿によって共有され，相互批判が可能になった次の段階での模索に委ねられるといえるだろう。エスノメソドロジーのような緻密な発話記録ではなく，あくまでも内容を主としながら，対話によって織り出されるこの種の記録が持つ人文社会科学全体における資料基盤への考察の展開を意識しておきたいと考えている。資料の内容とともにこのような視座についての御高批を得ることができれば幸いである。

Ⅱ　資料

最初の記憶

―いろいろ考えたのですが，結局，お生まれになったときからうかがうのが歴史的には正しいのかな，と思いました。ごく大ざっぱに，ね。で，お生まれは 1927 年の昭和 2 年の 1 月 14 日ですね。それで，子どもの頃の一番最初の記憶というか，思い出はなんでしょうね。

母親がね，私のことを頭が良いとか，良い子だとかいう話にね，あの，仮名の「の」の字を早くに覚えたって言うんですよ。平仮名の「の」という字ですよね。これをうんと小さいときに覚えたっていうんで，自慢じゃないけども褒めてくれたんですね。それはねえ，生まれた時の家っていうのが，そこの隣に，カワウソの肝を売っている家がありましてね。「川獺の肝」っていう看板が大きく出てたって言うんです。その川獺や肝は知らないけど，中の「の」の字を，私は読んだっていうんですよね。それはね，言われてみると，自分でも何となしにそういう記憶があったような気がしてきます。あの本当に自分で覚えてたのか，親が言うもんだから，そんな気になったんだか，それはわかりませんけど。

それが一番早い記憶になりましょうかねえ。ずいぶん早く福岡市内になっているけど，私が生まれた頃は，まだ糟屋郡なんとか村，前田とか言ったんじゃないかな。そこから兄が小学校に入る準備で引っ越しましてね。七つあがりって言ってたんだ。私も兄貴も早生まれだから。で，兄貴が小学校に入るのに，まあ，親馬鹿ですよね，親が学校の環境のいいところっていうんで，引っ越して，その家を離れた。その頃に福岡にはじめて出来た動物園っていうのが作られてく時期でして，それ

で，前のうちからは行ったことはないけど，移ってからはもうしょっちゅう動物園に行ってて，動物が大好きだったんですね。その動物園も今は引っ越してますから，今の動物園の場所とは全然違うんですけど，元は，戦前の福岡で，確か市内電車でも「動物園前」っていう停留所があったと思います。その動物園が出来ていくっていうことを何とはなしに覚えているような気がするけど，ちょっと不確かですね。親父が九大に勤めていたもんですから，福岡の東ですが，その近くの筈です。

それから家族関係では父の母，祖母が一緒にいましてね。それが東京に替わったところで亡くなるんだから，安政何年かの生まれで，ずいぶんと年寄りに見えたけど，今の僕くらいの年だったのかな。そのおばあちゃんと父母と兄と弟と，そんな家族が子どもの頃の家族ですね。

―動物がお好きだったというのは，まあ，先生の後年のお仕事と結びつけたくなりますが，何かその動物好きになるきっかけみたいのはあったんですか？

引っ越したところはかなり遠いんですけど，市内電車，チンチン電車で行くくらいのところですけど，しょっちゅうせがんでは，しょっちゅう休みになるとそこへ行ってたんですが，親にせがんで。その前から動物が好きだったどうか。そうですねえ，「川獺の肝」の看板があっただけじゃなくてねえ，これも不確かですけど，七面鳥を飼ってる家があってね，その七面鳥に追っかけられて泣いたとかいうことを親が言ってて，これもぼんやりと自分でもそんな記憶があるかのような感じを持ってます。「川獺の肝」は確かですけど。これは川獺がかなりいて，それを薬に売ってた家だと思いますけどね。

―あと，学校に上がる前の記憶は？

親の話とごっちゃになってしまいますけどね。なお，戸籍上はその家で生まれたことになってますがね，実際は九大の病院だそうです。これは母親が教えてくれたんです。九大の病院に行くときに，寒いときで何とかという話を聞いたことがありましてね。これはあとでね，小泉八雲だっけな。誰かがまさにその福岡のそんな場面を，書いてるのがあって，ああ，こんなだったのかなと思った覚えがありますけど。その空間を，だいたい私が生まれた頃を描いた文献が，何かあって，見たときにああ，と思ったことがありますけど，自分の記憶にはほとんどないですねえ。

小学生の頃

―学校にあがる時期に進みます。学校は福岡師範附属小学校で，これはお兄さんもそうですよね。

そうです。そのために親父は引っ越したんだと思います。

―附属に入れるために。

なんか，エリート家庭みたいな雰囲気を持ってたんでしょうね。

―入学前に，字を書いたり，英才教育みたいなことは。

兄貴の後を追っかけてましたから，特別，今の子どもみたいに教育を受けたわけじゃないけど，兄貴の本をかすめ読んだりしてて，ある程度の字は，片仮名くらいは読めてたと思いますね。あとね，附属小学校は入学試験があるんですよ。入学試験は口頭試問なんですけども，それにどんな問題が出るか，近所に小学校の教頭先生が住んでたんですけど，そこに一遍行って，試問を，予行をやらされるっていうのがありました。それを覚えています。それは火鉢を指して，これ，なんて言う？とか，火箸を指して，これ，なんて言う？とか，その区別なんていうのをちょっと苦労した覚えが

ありますけど，そんなふうなことでしたね。そしてこれはもう言ってもいいんでしょうけど，あとで，実際に試験を受けた時にかなり似た問題が出たんです。それで，「先生に聞かれたのと同じだったよ」って言ったら，「そんなこと言うもんじゃない」って叱られた覚えがあります。

―その頃から「お受験」があったんですね。

これはまあ，附属小学校の特例でしょ。附属小学校っていうのは，そういう家の子が多かったんですね。それは後で言いますけど，東京に転校してずいぶん，差を感じました。

―中野の桃園小学校ですね。3年の3学期までですが，最初の師範附属の時の記憶っていうのはありますか。

これはずいぶんありますね。先生はね，後で思っても優秀な先生でした。師範学校教育の優等生みたいな方々がね，附属小学校の先生になっていたような気がしますね。それで非常に熱心でまた愛国者。それでいて一面では生徒さんの家に比べて比較的，貧乏なお家の育ちの方で，刻苦精励して，模範的な先生になったという方のように思いますね。それで父兄の中にもそんな噂があるんですね。「あの先生は師範を1番で出た」とか「何とかの担任は2番だった」とか，そういう噂があったりしましたね。もう一方で，案外大きな意味があったのが教生先生というので，師範学校の寄宿舎がありまして，そこからやってくる教生の先生ってのが，今の教育実習と違っていつもいたような気がしますね。人は変わっても。その教生先生っていうのいがいろんなタイプの人がいましてね。まさにそういう優等生，それからちょっと拗ねた感じの人も，ね，いました。

先生は生徒を殴ったりはなかった，と思いますけど，教生の先生は時に先生がどこかに出張して，教生の先生に任されてる時に「お前らは先生をなめてるぞ」とかいう言いぐさで，軍隊式のビンタくらい呉れてましたね。それからなんて言ったかな，何か，あの，子どもとふざけっこして，ふざけっこの中にこれも今にして思うと，あの，セクシャルな，稚児愛寵みたいなそんな雰囲気もあったように思いましたね。くすぐりあいっこみたいなのね。それを帰って家で親に言うと，親は非常に腹を立ててましたね。

―それはお母さんが？

親父の方でしたね。親父はそれ，分かったんでしょう。母親はあんまりそれ，分からなかったんじゃないかな。寄宿舎にその連中が住んでおりまして，そこにあんまり遊びに行ったらいかん，なんていうことを，教生の人の方は誘おうとするが，いかん，なんて言われてましたね。学校の先生がね。それから子どもも，生意気な子どもですから，教生に対して馬鹿にするような雰囲気があったのかもしれませんねえ。

ただ一つ，かなり強烈な思い出がね，あります。というのはね，私が生意気で，家の中では威張ってるけど，内弁慶っていうか，外に出ると弱い。早生まれですから同学年の子の中で一番小さいですしね。それに家の親父が近所の子と遊ぶっていうのをあんまりさせなくって，内弁慶で来たのが附属小学校に入って，そこでもガキ大将みたいのがいて，そのガキ大将みたいのに全然頭あがんなくて，それでいて，何か自分がホントは偉いんだ，なんていう妙な感じがあったりしましてね。で，野次馬根性みたいな，そんなので自分の存在を示してみたい，そんなのがあったんじゃないかなあ，それを端的に示す事件をいっぺん起こしてるんです。これは2年の時かなあ，3年になってかなあ，附属小学校ってのはいろんな行事がありましてね，学芸会とか音楽会とか，いろんな行事があるん

ですね。それには教生の先生が一生懸命，算段して，あの本当の先生が後ろから見ているようなそんな雰囲気もあったんだ。何か学芸会みたいの，全校学芸会でしょうか，ある学年だけじゃなくて，全校の生徒が集まって，あの終了式みたいな，そこで教生の先生が，十六，七歳でしょうか十七，八歳でしょうか，若い先生が一生懸命，終了の挨拶をしまして，「本日はナントカ」って要するに物々しい，練習してきたのをしゃべるんですねえ。途端に一人，野次った子どもがいましてねえ。それが私なんです。野次ったっつったって大したことじゃない，「ああ，そうですか」っつったんですけど，そしたらその教生の先生，本当に真っ赤になって，絶句しちゃいましてね。みんなは笑うし，その先生は本当に気の毒なくらいに，ね。後から教生の先生じゃない，本物の先生から散々叱られた覚えがあります。これはきつかった，というか，どうもイヤな，あとになってから，どうもあんな空気，俺にあるんだなあってなことを思い出したりします。

―それはちょっと茶化してやろうという感じ。

そうですね。多分，それも響いて，小学校の操行がそれまでは良かったのが非常に低い点がついて。乙をくらったんです。それだけじゃなくて，なんだかそれからよく叱られました。学校の成績もはじめ良かったんですけど，ちょうどその頃から。小学校の成績っていうのは担任の生が全部つけるでしょう。だから，今思うと，先生がこいつヤな奴だ，と思うとみんな低くつけるようなことになってたんじゃないかなあ。こっちも先生から嫌われてると思うとあんまり勉強しなくって，成績がどんどん下がっていったような気がしますね，その辺で。

―それに対してお父さんは？

そんなに叱られた覚えはないけど。兄貴が家に帰って言ったのかな。それでちょっと母親には叱られたけども。担任の先生からずいぶんこっぴどく叱られたな，あれは。今でもそういうイタズラはやりたいような気がしますけどね。それから親に心配かけたのは，色盲っていうのがね。私，色盲なんです。軽いんですけどね。なんかそれを，そのイタズラよりも前だと思いますけど，学校の先生が発見しましてね。なんか写生をさせられてて，クレヨンですけど，クレヨンで描いてる時に，葉っぱを赤く描いたのか，赤い花を青く描いたのか知りませんけど，全然間違った色を塗っていて，それで，附属小学校ってのは丁寧なことに親を呼びだしてそれを告げたらしいんですね。で，母親がずいぶんこれはショックを受けたらしくって，母親の方の遺伝なんですね。というようなことを母が知って，ショックを受けがっくりしてたのを，自分ではそれほど色盲ってのが悪いこととか，将来に希望がなくなるとかいう，そんな感じないんですけども，母親がえらいがっくりしてたのを，なんか覚えてますね。ただ，中学の後半，みんな予科練に行け，とか，士官学校行け，とか，あんな中で，むしろ色盲を理由にそれを簡単に断ったような気がしますけど。今でも普通，日常生活で困ることは何もない。母親は信号なんかを，赤い色を青い色に間違えたりしちゃいけないとかなんとか，信号の色を間違えることはないですけど，この頃多いでしょ，カラー刷りした文献の，あれいかんですね。

それからあの，その頃かな，大島正満って動物学者の『動物物語』って少年向きの本が，ベストセラーになって，いい本なんですけど，それん中に色盲の話が，一つの章とって出てましてね。こらは色盲の遺伝に関する知識を子どもに与えようとしているけど，色盲の怖さっていいましょうか，ネガティブな面をかなり強調して書いてまして，ちょっとショックを受けました。そんな覚えはあ

りますけど。

その先生が愛国者であったということはね，国際連盟脱退の詔書が出たっていうんで，師範学校の校長が生徒に読んで聞かせる，そこへ附属小学校の子どもまで一緒に行って並んで聞かせられた。そんな場面で，小学生が騒いじゃいかん，っていうんで，附属学校の先生は小学生をきちんと管理する仕事をかなりきつく命ぜられていたらしいんですね。ところが，小学生はやはりそんな話面白くないからわいわい騒いでいる，騒ぐなかでちょっと危険分子が私だったらしいんで，先生が側にいて，ちょっと喋るとすぐに注意したりなんかしてましたけど。何かあの，その時の話の中身はちょっと覚えてますね。あんまりわかんなかったけど。それを受けてか，樋口先生というその担任の先生が，アメリカの戦艦は何隻あって，日本の戦艦は何隻で，日本は危機にある，っていう話をよくやりましたし，それから最も印象的で，私が福岡の生まれであるってことを意味を感じさせられるのは，東公園っていうところに日蓮の銅像があるんですけど，日蓮さんの銅像の台石のレリーフに，日蓮の一代記があるんですが，中に日蓮が蒙古襲来を予言した話にからめて，蒙古の軍勢が日本の女子どもの手に穴を開けて，縄をつけてそれを引っ張っていってる場面があるんですよ。それをその先生が見せて「戦争に負けるとこういうことになる」っていう話をかなり強烈に覚えてます。ずいぶん経ってから，そこに見に行きましたら，そこの部分がピカピカに光ってた。そこの部分をみんな，手をなぜて，見たんだろうと思います。遠足で行ったときだったかもしれませんけど。長野県に後で行ってから，思ったんですけど，長野県の子どもっていうのは，そういう実地教育の場ってのはないんでしょうけど，福岡の子どもはしょっちゅう海の向こうは外国である，といった教育を受けたんだなって感じを改めて感じましたね。

日蓮の像ができたこと自体は近代史の問題として面白いんですが，その後深めてません。当時の福岡の少年たちの軍国主義化を助けるには一役かいましたね。

読んだ本の思い出

―その頃読んだ本で，覚えているものは。

その頃，ちょっとした家では子どもの雑誌をとってまして，二通りありまして，一つは「幼年倶楽部」「少年倶楽部」って講談社の系列。もう一つは小学館で「小学一年生」「二年生」っていうのがありました。なんか「幼年倶楽部」「少年倶楽部」っていうのをとってる友だちがいて，それを羨ましかったが，ウチではそれをとってくれなくって，「小学一年生」っていうのはだいたいとってくれたのかなあ，「小学何年生」ってのは読みましたねえ。「幼年倶楽部」や「少年倶楽部」は何となしに友だちに借りてみたような気がしますけど。それから，親が，回覧雑誌会みたいのに入って，雑誌の回覧制度ってのあったんですねえ。今から思うと「中央公論」くらいとってたのかしら。そうした雑誌が幾つか，回ってくるんですね。それん中に親父が見てたような雑誌は到底，子どもが見るようなもんじゃなかったけど，母親が見てた雑誌に付録の子ども読み物が出てたのを，ちらちら見たり，母から話を聞いていたように思います。そして，附属小学校ってのは恵まれていて，人を呼んできて話をさせるってのがありまして，その筆者と，母親の雑誌に書いてる人が同じ人だったなんてことがありました。沖野岩三郎とかね。沖野岩三郎は同級生に孫がいたと思います。当時は少年読み物作家みたいな感じでしたね。それから，久留島武彦。これは面白かったですね。講演

というより「お話」ですね。あの確か附属小学校の全校生徒を集めての話じゃなかったかなあ。それと例えば「のらくろ」なんかは見てましたな。借りてきて読んだんだなあ，あれは。

どういうわけか知らないけど，学校に雑誌が寄付されてそれを貰ったことがありましたね。「少年倶楽部」とかじゃなくて，それと対抗するような形でできてきたいろんな雑誌社が，宣伝のために全校生徒分，寄贈してくれたんでしょうね。

その頃の雑誌は，いろいろな良心的な読み物があって，例えば，松村武雄，神話学者。あの人なんかが書いてるのなんかありましたね。「小学校何年生」に。その松村武雄さんの肩書きに文学博士って出てきて，「「文学博士」ってどういう人ですか」って聞いて，なんか「偉い人」みたいに言われて，「じゃあ大きくなったら文学博士になろう」，なんて言ってたことがありました。それから，これは「幼年倶楽部」の方かな，宮尾しげを，なんて人が書いてましたしね。かなりの人がそういう少年雑誌に書いてたように思いますねえ。

―活字を追うことと，身体を動かすことを比べると，やはり本を読むことの方がお好きでしたか。

そうですね。特に父親が近所の子と遊ばせない感じがありましてね。それから，非常に不器用でしたね，私。小学校でね，操行がさっきの事件なんかもあったんだけど，それ以外にね，弁当なんか持ってくると，もうやたらこぼして，飯粒を下にこぼすような，それがひどかったですね。私ともう一人，そういうのがいまして，それも良くなかったですねえ。上着のボタンを，ですね，あれを一番上のを二番目の穴に入れたりなんかして，あとで間違ったって直したりなんかする，そういう点も不器用でしたね。生意気だけど何も出来んような，そういうあれがあります。

あの，フットベース，サッカーボールみたいのをホームベースに置いといて，それを蹴って走り出す。それをよく小学校でやっていて，これも私の番になると相手は安心していて，逆に私が守った位置にボールが来ると，「危ない」と，みんなは言うみたいな，そういう点では劣等児で，ただ学校の勉強はわりといい方にいってたんじゃないでしょうか，少なくとも前半は。それから子どもたちがよく喧嘩をするんだけど，喧嘩をするとだいたい，負けて泣いてるのがこっちで，ね。喧嘩で勝ったような感じはないですね。でも時には裏山に悪童たちがいっぱい遊びに行く，それが昼休みに行って，午後の授業が始まっても帰ってこない，その中に入ってたようなことはありましたね。

―お兄さんと同じ学校ですが，その影響というか，効果は。

兄貴が上にいて，兄貴のことを見習って育っていくっていうのはずっと，2年くらいの兄弟だと，ね。いつものことで。国語の読み方とか歌とかいうのは，ある程度兄貴がやってるのを，どれだけ理解してるのかわからんけど，少しは吸収していきますから，それは違うでしょうね。親父は非常に長男に期待かけてるっていうか，長男は教えよう，教えようとしてましたね。その点私はそれほどは，と思いますけど。親父は理科のあれですから，いろんなこと教えようとしてたみたいね。日食は―その頃日食があったのかな―，日食ってのはどういうことだってのを教えようとしてましたね。私の場合は，あとで大変問題ですけど，親戚の家を継ぐことになってまして，その約束が前からあったもんですから，母親はそこでなんか私に引け目を感じ，なんかそんな感じは，その頃からあったのかもしれません。

―塚本明籌（あきかず）（塚本明毅の三男。他の男子が早世したので明毅の後を継いでいた。）さんの養子になるということが、先生がお生まれになる前から決まってたんですね。

そうなんです。ええ，熊沢の次男は塚本の家を，っていう約束だったそうです。塚本明毅（あきかた），この人は人名辞典なんかに出てくる人ですが。実父の尚文の父親は熊沢善庵，医者です。ちょっと明治の科学者みたいな面を持ってます。

それで，熊沢の二番目は，（塚本の）跡を継がせるという約束が，結婚する前からあったんだそうで，私はイヤだ，イヤだ，言ってたんですけども，そう決まってるということでした。

（2003 年 4 月 22 日　歴博にて）

養子になる

前回はどうも福岡にこだわりすぎた話をしてしまったような気もします。まあもう少し，当時の小学校の生徒が置かれていた状況，全体もお話しなくっちゃいけなかった。例えば，学校の「唱歌」の授業で日本歴史をやっちゃってる。ずいぶん，高級っていいますかね。それから，「読み方」っていいますでしょうか，国語もずいぶん難しいけども，「唱歌」でもずいぶん難しい文句が出てきますし，一面では，当時の感覚での日本歴史の，主要なテーマっていうんですか，それがほとんど全部盛り込まれちゃってるんですね。

―前回は塚本家に行く，というところまでお聞きしました。塚本明籌さんとお父さんとは従兄弟になられるんですね。

ずいぶん，年が離れてますけど。むしろ叔父甥みたいな感じでしたね。末っ子でしてね，実父の熊沢尚文が，祖父の熊沢善庵の，ね。姉が 3 人いて，それぞれ結婚してて，親父からすると義兄が 3 人偉い人がいまして，それと同格みたいな感じでしたね，塚本明籌も。

こういう，生まれながらにして継ぐ（別な）家が決まっているみたいな風習はずいぶんあったようですねえ，特に士族社会で比較的あったんでしょうか。私の母も実は尾田って家の長女なんですけど，女学校時代は上田って名乗ってまして，それはやっぱり父親が同藩士の上田っていう家との約束で，養女になってたと。養女になってたのにどういうわけか，熊沢の家に嫁に来ちゃったという話でしたねえ。

―士族の家という，熊沢家も塚本家もそういう位置づけでよろしいですか。

そして，士族でも身分は低いんですが，学問っていうか，科学っていうか，西洋の学問を少し身につけて，明治以降はテクノクラートみたいな位置にあった家ですね。

―人名辞典の類を見ると，熊沢善庵さんなんかは化学の人として挙がってくるんですね。塚本明毅さんは海軍の士官…

幕府ではそうですね。

―維新後は，兵学校の教授，内務省の少書記官になられて，改暦の時の担当者でもあった。当時の最先端の技術をもって政府に勤めていた。明籌さんのお仕事はどういう…

これがまことに不孝な養子であって，あんまり知らないんですね。東大の法学部を出て，官僚であったことは聞いてます。そして晩年は一応，実業界に名を連ねてはいたようですけど，私の知ってる頃はもうやめてましたね。私は塚本の家を戸籍上，継いだのは，東京に転校して，転校したときに苗字が変わるのは抵抗ないだろうって感じでしょうか，転校したときに戸籍上，塚本の子どもになったんですけど，親の職業の欄に「無職」と書いてあって，友達から，お父さんが無職でどう

して暮らしていくんだ，なんて聞かれていやーな感じした覚えがあります。いくらか，経済官僚みたいなかたちで政界にもかかわったんでしょうか。そんな噂も聞いてますけど，ほんとに何も知らないんです。

―先生が養子に入られた時はだいぶ，お年だったわけですね。

そうです。60くらいだったんじゃないでしょうか。帝人事件っていうのがありまして，三土忠造って政友会から出た，鉄道大臣か何かやった，そういう人たちが贈賄事件，収賄事件で逮捕されて，長いこと裁判やった末に無罪となった，という事件がありましてね。事件そのものは私もよく知りませんし，日本史上の謎なのかもしれませんけど，そこらへんで失脚したかのような気がするけどよくわかりません。親分は三土忠造だったような話で，彼は明らかにそこで失脚しているんですね。

塚本明籌の家にどういうわけか，いっぺん，養女に入った人がいるんです。養女に入ったのにウチの母と同じで嫁にやっちゃって，それで私の母が，「あの人が婿さんとれば，学をやらなくていいのに」なんてぼやいてたことあるんですけど，その婿さんはほとんど交渉ないんですけど戦後，自民党の代議士なんかやってたりして，それは鉄道省の閥みたいなものだったようですから，なんか鉄道省と関係してたのかな，塚本明籌って人は。本当に恥ずかしいくらい何も知らないんです。と，言うのは親父（実父）のかなり年上の兄弟みんながそれぞれ，お子さんがあってね，私にとっては兄貴よりか，もう一回り上の従兄弟がそれぞれの家にいまして，それが魅力的でしたけども，塚本の家は当然ですけど，子どもがなくって，従って，東京に出てきてからですけど，おじさんたちの家に連れてってもらっても，従兄弟がいっぱいいる家だとそれなりに遊んでもらって楽しい面もあったんですけど，塚本の家っていうのはそんなふうで，おまけに，やっぱり子どもを持ってないせいか，その塚本明籌って方も悪い方じゃないって今思いますけど，子どもに接する接し方っていうのは全然，心得てらっしゃらないような感じでして，どうも悪いけど，本当に縁遠い，縁薄い付き合い方でしたね，私にとってはね。

―小学校3年の学少年がお年寄り二人の家にポンと入った，という。

家に入りはしなかった。戸籍が入るだけで，あのずっと家にいるんだからいいだろっていう納得のされかた。ただお金はもらってたようですね。どうしてか熊沢の家っていうのは，まあ，大学の先生っていうのはそんなにお金持ちじゃないことは確かですけど，それでもそれなりの暮らしはできた筈ですが，子どもが多かったせいか，ずいぶん熊沢の家は貧乏な家だっていうふうに慣らされてきたのに，塚本の家はお金持ちだと，みんなから言われてて，で，確かにお家は確かに立派なお家でした。で，お金持ちの家に養子に行ったみたいな，雰囲気があってそれがちょっとイヤな感じがしてましたね。あの横山隆一の「フクちゃん」，あの「ケンちゃん，フクちゃん」シリーズが朝日新聞の連載で初めは「養子のフクちゃん」っていうんじゃなかったかしら。フクちゃんが貧乏な子どもだったのに，お金持ちの養子になって，突然ちやほやされる，っていうそんな筋だったように思うんですけど，その「養子のフクちゃん」っていうのをそんな頃に見ていて，なんか，別にお金持ちの塚本家に行ってそこでチヤホヤされたってことはないんですけど，なんか養子って言葉が嫌いでした。

東京での経験

―東京に引っ越されたのは，熊沢家が引っ越されたわけですね。

これはね，熊沢尚文がね，（九州）大学の助教授で，外国留学制度で2年間，ドイツに行ってたんですね。2年間ドイツに親父が行くんで，母親の実家，尾田さんの家に面倒見てもらえ，って，尾田さんの家が中野にあって，その近くに借家を借りて引っ越したんです。36年，昭和11年ですね。36年の2月か3月頃，親父が出かけたのかな。そのすぐ前の35年の12月に初めて東京に行ったんですね。でそこで2年間過ごしたってことです。（塚本家の養子になっても）ずっと熊沢の家にはいました。家にはいましたけども，なんか弟なんかは，まあちゃん，と（私を）呼んでたんですけど「まあちゃんを塚本にとられた」なんてことを，後から言ってました。私にとっては塚本って苗字が変わったっていう感じで，熊沢の方でいうと，塚本から預かってるっていう感じを否応なしに持ったと思いますが，その変化よりも福岡から東京へ変わったという変化の方が，現実的でしたね。

―福岡の師範が優秀な学校で，その中で体力よりも頭で活躍っていう感じで，…

いや，体力でもそうミゼラブルではなかったような感じだったけど。東京に行ってからでしたね。ただ，福岡の学校はいかにもエリート学校でしたね。あの文部省かどっかからの指示によるんでしょうね，あの先生が「今日朝御飯食べてこなかった人，手を挙げて」っていう調査があったんです。朝御飯で御飯じゃないもの食べて来た人って調査があったんです。これは後から思うと，恐慌の時代で東北地方なんかで食べられない子どもがいっぱいいた，それの調査を全国いっせいにやったんでしょうけども，付属小学校はてんで話にならないんで，一人，私の家以上にいいとこのお嬢さんで，「朝，イチゴを食べてきました」って，子がいましてね。イチゴってのは今ほどじゃない，高級な，だから，あれ，子どもたちみんなわからなかったけど，先生が一番，どうも私らのとこは真面目ないい先生でしたけど，非常に家庭的には苦しいところから育った方のように，後から思うんですけど，つくづく思いますね。そういう環境で，東京に転校したら，東京は福岡と違って，人がたくさんいて，水準も高いからしっかりしなくちゃいけないよ，なんて言われてたんだけど，実態は逆でして，福岡がエリートだったのに対して，桃園第五小学校って言ったんですけどね，やっぱりお金持ちもいたようですけど，ほんとに庶民でしたね。

友達で，さっきのイチゴの話と対照的なのは，弁当にシャケの，塩ジャケのからーい塩ジャケのあれをおかずに持ってきてる子が，皮を残してるんですね。皮をどうすんだって聞いたら，「親父が晩酌に肴にするから，親父に売るんだ。これを親父に売ると一銭もらえるんだ。」って，そういう環境ってのは，全く違う，朝食にイチゴ食べてくるってのとは。

それからかなり田舎でしたね。福岡は方言があるんですけど，中野も今の佐倉以上に田舎ことばだった。

―おうちはどの辺だったんですか。

中野。なんて言うかな，歴博に勤めるようになってから一回，そこを歩いてみたんですけど，そしたら少し思い出しましたけど，有名なお寺で宝仙寺ってのがある，五重塔かなんか，今はなくなってます，戦災で。宝仙寺の五重塔っていうのはちょっとした文化財だったんですけどね，戦災でなくなった。そこで遊んだおぼえがチラッとありますし，それから氷川神社って言ってもわからない

ですねえ，氷川神社なんてやたらとあるから。桃園通りっていいましたかねえ，バスが通ってましたね，家のすぐ前を。東中野です，今の交通路線でいうと。東中野から南でしょうかね。南に坂を下るだなあ。そこに井の頭の方から川が流れていて，それに沿ってちょっと家が並んでて，それに沿ってバスが走ってて，バスが大正バスって言ってたんですねえ。そういう雰囲気は今もだいたい残ってましたね。大正バスっていうのを，荻窪にあのもう一人の伯父がいまして，偉い従兄弟がいまして，そこに走ってたのが昭和バスで，こっちが大正バスで，こちらが古いなっていったら，親父がいや，向こうの方が田舎なんだ，って言いました。そうなんだと思いますね。そして，桃園小学校の先生が悪かったわけじゃありませんけど，生徒の雰囲気が，社会階層的にはずいぶん違った。それはもう確かですね。下町の貧乏人っていうか，かなり農村的な，小さいお店とか，職人さんとか，ただ大地主ってのがありましたね。大地主で，家作をたくさん持ってて，土地のボスみたいな家の子がいましたね。それから新住民になるんでしょうかねえ，会社の社長さんだとか，家に女中さんがいて，「お坊ちゃん，お坊ちゃん」ってみんなから，むしろからかわれていましたけど，そういう人がいましたねえ。

―先生の家も，熊沢の家自体も家をお借りになったんですか。

はい。まだ祖母が一応，生きてまして，あれ，80ちょっとだったかな，当時としては珍しい年寄りみたいな感じで，それを要するに熊沢尚文の姉が3人東京にいて，いろんなとこへ行ってた人がいたけど，だいたい東京に戻ってきてて，みんながそれを大事にしてくれたはいいけども，ウチの母親にとってみると良くできるうるさい小姑から監視されてるみたいな感じで，それで親父が「頼むよ」って外国に行った後，母親がずいぶん苦労したんだと思いますよ，伯母さんたちの眼の中でね。

それから一方で母親の兄が，これがうんと若いんですね，母親とあんまり変わらない年で。ウチの親父よりか若いんですね。工学部出て，陸軍に勤めてたんじゃないかな。これが世田谷に住んでましてね。これが世田谷の松陰神社のすぐそば。後で学生時代にそこに世話になったんですけど，そこに当時，結婚して間もなく奥さんが結核になったんじゃないかな。結核の奥さんと二人で暮らしてて，そこに母親も長いこと行けないでいた。「伝染るからいけない」なんていわれて。それがウチのおばあさんが亡くなってから直後に亡くなりましてね，その結核の奥さんがね。母親が亡くなって，ちょっとウチの母親としては息をついだみたいな感じだったんじゃないでしょうかねえ。それでそのすぐあと，また，兄嫁が亡くなって，お兄さん―「世田谷の伯父さん」って，私呼んでた方―は，一人でさびしくって，しょっちゅう遊んでもらってた。こっちも遊びに行って，たぶん，それで結核菌にふれたんだと思いますね。亡くなった後ですけどね。

東京に出てきてショックだったのは，35年，昭和10年に出てきて，翌年の2月，東京は稀にみる大雪。やっぱ東京はちがうなあ，と思ってたら東京の人も，かつてない大雪だって言ってた，その大雪のなかで，２・２６事件ですね。２・２６事件でまた，福岡の郷党意識みたいのが出ちゃったんで，広田弘毅，あれ福岡で郷党の偉人だったんです。「小学何年生」なんて雑誌なんかでも，これは近代史やっておられる方はどう言っておられるかなあ，原敬は平民宰相なんて言われるけど，本当の平民宰相の最初は広田弘毅なんじゃないでしょうかね。原敬は何かかなり，有力地主かなにかの家でしょ。広田弘毅は石屋の倅なんですね。で，一面ではいかにも福岡ですね，あれ，修猷館っていう，藩校のあとを継いだ中学校から一高出て，東大出て…。そして一面では，修猷館では柔道

で鳴らしてた。それから国士的気概もあって，寡黙で。それが外務大臣になったんですね，何内閣だったかな，福岡にいた頃。それを友だちに向かっていばってたような気がしますね。福岡，田舎から転校してきた子みたいに東京の人は。こっちは「東京は田舎だ」みたいに思ってる。向こうは「田舎から転校して来た子」。「田舎っていっても福岡は外務大臣も出てるぞ」ってったら２・２６の後，その人が総理大臣になっちゃったもんですから，ますます，別に威張ることないんだけど，何か。広田弘毅はいろいろ後も縁があるんです。中学に入って，その後輩になるわけですし，中学の時は話を聞きましたし，高校出てから大学時代，県人会が経営してる寮に１年いたんですけど，それが広田弘毅なんかが作った寮で，いろいろ思いはありましたけど，それは後の話として。福岡の出だってことを，向こうは田舎っぺだってことに対して，こっちは福岡の出だってことをむしろ威張るようなところがありましたね。これはやっぱり附属小学校の教育の中で郷土愛みたいなのをしきりに力説されていた，その影響を素直に受け止めていたんでしょうね。でも，こういうことを言うと偉そうにみえますけど，何か，ある批判的精神みたいなものもあったんですね。何か疑問を持ってましたね。

―それは郷土愛に対して？

郷土愛にっていうか，小学校での，福岡の時のですね。例えば，ヤマトタケルノミコトがどっかで賊に囲まれて周りから草に火をつけられて，剱を持ち出して草を刈ったら，火が向こうに逆に移っていって賊が焼け死にました。って，草を切ったらどうして火が逆に動くんですかって聞いて，なんか叱られたような記憶があります，これはもしかしたら後になっての疑問かもしれませんけど。福岡はすごくいいとこだって話を聞かされる。何かの産額は日本一だ，何かの産額は日本一だって。今でも覚えてますけど，菜種油の産額が日本一かな。いろいろあるんです。いろいろあるんです，まあ数えていけばあるんでしょう。そして意外に思うかもしれませんが，偉人とされている人に菅原道真があるんですね。太宰府天満宮っていうのは子どもたちが必ず遊びに来るところだったし，菅原道真の話を郷土愛や愛国心に燃えた先生がよくしてくれるなかで，左遷されるって言葉をなんておっしゃったかなあ，なんか，京都から追われて太宰府にやってきて非常に不遇な位置にあったっていう筋のお話があるんです。福岡はこんないいとこで，そこに移ってきたのにどうして虐待なんだろうっていう，あの疑問は今もちょっとありますね。

愛国心と郷土愛に燃えた田舎出の子ども，そしてそんな喧嘩強いわけじゃないけども，えらい口は達者だったのかなあ，なんか，そんな気がしますね。変な子どもだったでしょうね（笑）。

―福岡を背負って東京に乗り込んだような感じ。

うーん，自分ではね。それ，あったかもしれません。

―中野の学校生活での記憶は。

これはね，２年間の２年目に非常に特徴ある先生に接しましたね。これはね，そういうタイプの先生が東京の小学校にいたんですねえ，苦学生の先生だったんですね。中央大学の夜間か何かに通いながら先生してみえたのかなあ。これがまたあの，あとで聞くと福島県なんですけど，仙台であるかのような受け止め方してましたね，あの，「カチカタ先生」って言ってました。「書き方」が得意な先生で，それを東北弁で「カチカタ」って言ったんでしょうかねえ。「カチカタ先生」「カチカタ先生」っつったけど，これが，非常に私と気があったというか，私，福岡ではこないだいったよ

うな事件もあって，生真面目な先生からむしろ悪く思われていた。その佐藤清治先生って先生から，非常にかわいがってもらいましてね，4年生で男女別クラスになるんです。4年生で男女別クラスになるのに1クラスだけ男女混合クラスがあった，そこに入ったんですね。何かあの頃は勉強をがんばってたのかなあ。一方では女の子の方が成績が良くってね，これは小学校でよくあることですけど，女の子で3人ひどく出来る子がいて，男の子で，男で一番出来るのが私であって，時々その女の子に負けたり，こっちが勝ったり，っていうような感じみたいな気がしますけど，そういうなかで，何かその先生からずいぶん可愛がられたって気がしますし，一番私が今もって覚えているのは，ちょうど，その翌年ですか，中国との戦争が始まる。その時にそのカチカタ先生が「この戦争に君らも行くことになるんじゃないか」なんてことを言ったのを後になって思い出して，あの先生偉かったなあ，ってね。その先生はあとで弁護士になりましてね，司法試験を受けたんでしょうね。実を言うと大学時代，もういっぺんお世話になってるんです。何か，新宿に私立の学校がありましてね。そこの経営陣の中に入ってたのかなあ，アルバイトはないかって言ったら，そこで非常勤の講師をやらしてくれたり。大学生の時，私，高等学校と大学では講師やったことあるけれど，中学校で講師やったのはあれだけなんですけどね。淀橋なんとか中学って言ったけど，公立でなかったような，公立だったのかなあ，あれ。でも授業もヘンでしたけどね。本当に貧乏学生で，もっともみんな貧乏な時代だったけど。何にも知らないのに（教えてた）。で，生徒はっていうと，これまた暴力団の子分みたいのがいたりしてましたし，焼け跡の中のできたばかりの新制中学でしたから。そんな時にも世話になって，あともずっと年賀状のやりとりくらいしてたのに，亡くなられたんでしょうね，このところさっぱり。あの先生には別の意味でえらい世話になったんですけど。

ああ，そういえば，大学に入ってからでしょうか，あの，こんなの読みなさいって民俗学の本をいただいたことがありました。民俗学の本って言っても何か法社会学みたいな，今もどっかにあると思うけどな，家探せば。柳田じゃなくて，社会学か法律の，そんな，家ですね，家族制度みたいな。そんな普通の師範出とは違った，あの苦学生みたいな先生が見えたのはやっぱり東京ですねえ。

その先生が大事にしてくれたっていうのは，軽い結核に罹って，非常に…。まあ勉強はできるし，まじめなのに学校を休むっていうので，大事にしてくれたのかもしれません。

病気と家庭環境

―結核に罹ったってことは，当時はかなりのダメージだったのでしょうか。

そうですねえ，ただ，結核のこと肺病って言ってましたけど，肺病とは（私は）言われなかったですね。肺門リンパ腺とか何とか，ほっとくと肺病になっちゃうから何とかって言って，実は結核の初期に間違いないんですけど，肺門リンパ腺って言われてまして，親父の姉の亭主のなかに一人，医者がいたんですよ。神田の町医者として。いいお医者さんでしたけど，その方が非常に面倒みてくれて，それで私，助かったんだと思いますね。この診断っていいましょうか，指導はあの頃としては適切だったんじゃないでしょうか。まあ，休みなさい，と休んで身体を安静にして，そしてどういうわけか，あの小魚をグツグツ煮て骨ごと食べなさいと。あの頃，もう東京の人も忘れてることかもしれないけど，新宿やなんかで露店みたいなとこで，ここらへん（佐倉）から来ていたのかもしれません，鮒だとか小さい鯉だとか，そんなのを生きたまま盥に入れて売ったんです。それを

買ってきて土鍋でグツグツ煮て，それを食べろ食べろってウチの母親がしょっちゅうそれ買ってきて煮て出してくれました。あれいい指導だったんじゃないでしょうか。薬なんてないあれですし。でも友だちが野球なんかやってる時にそばで見ていなきゃいけないみたいな，そんな，学校もしばらく長いこと休んでたりするような，あれはずいぶん，後遺症として残りましたね。だから，勉強は出来るけど体力は全然ないって感じにはっきりなったのはその時期。その前でも，そう運動ができる方じゃなかったと思いますけど，その時に苦手に。ただ不器用ではあったんですね。病気になる前は，けっこう，あそこらへんの悪童たちと一緒にあの頃は空き地がずいぶんあった，そこでキャッチボールやったり，何かいろいろやってましたね。それを続けていればよかったんでしょうが，すっかり離れちゃって，そこでずいぶん曲がったっていうか，ね。

―肺病は東京時代と重なるわけですね。

まさにそうでしょう。それはあの，かなり一般的な話だったでしょう，田舎から東京に出てきた人が，無垢の少年が簡単に罹ったんでしょう。やはり東京は結核菌のあるところで，福岡はその点ではまさに田舎だった。福岡に戻っても親は心配して医者に診せたり，何か激しい運動はやるな，って言われてましたね。戦争が激しくなってそんなことは言ってられなくなる，そのうち何だか忘れちゃったみたいな，感じでしてね，結核菌持ってるってことがね。いつのまにか忘れちゃったみたいな，そんな人はかなりいたんじゃないでしょうかねえ。

―あと，東京時代では，従兄弟の方々との付き合いが大きかったわけですね。

そうですね。福岡に居たときもですね，伯父の一人が台湾へ行って，東京へ引き上げる途中に寄られたのかな，伯父さんが時に福岡に寄ることがあって，そん時に従兄弟と顔を合わせたことはありましたけど，東京に出てきてから接触が密になりましてね。これはやっぱり年齢の違いだけじゃなくって，家庭環境，文化の違いっていいましょうか，ありましたねえ。特に大きかったのが田中さんのご兄弟で，最近亡くなったんですけど，中国近代史の田中正俊さんってのがこれが一番私に年が近い方でしょうかね，小学校の３年くらいの時に向こうさんは，凛々しい中学生でして，で，そこの家に行くと，ある種の家庭はそうでしょ，小学生全集ってのがあって，そういうものが揃ってまして，まあ読むのは好きだったから，盗み読みしてましたね。でもウチでは買ってもらえなくって。あれはもう，稀に見る高級知識人の家庭だったでしょうね。親父さんが台湾の師範学校の校長をやってたのかな，出てこられて。従兄弟たちはみんなえらい（出来た）。田中正俊さんとはあと，大学で一緒になりました。戦争へ学徒動員で行って，帰ってきて卒業は私と一緒だった。それから信州大学にいた時に東洋史に，東大を定年で退職されたあと御一緒になりました。ちょっとですけどね。私，こちら（歴博）に来る直前ですから。

―あとの従兄弟は。

一番上（の父の姉）が，幣原。これは東京に出てすぐ死んだおばあさんが，おばあさんにとっては娘なんですよね。娘の中で一人だけ平民のところへ嫁にやっちゃったって言ってたのがそれ。それが，幣原タイラ。タイラって普通読んでくれないですけど，平坦の坦でタイラ。幣原喜重郎の兄貴，弟でしょうか。これはもう台北大学の学長をやってたのかな。韓国で日韓併合前に後から思うと―イールスってご存知かな。マッカーサーの手下で，我々学生時代に反イールス闘争ってあったんですけど，要するに占領文教行政を強力に推進した，マッカーサー司令部の文教

官僚なんですけど―韓国末期にそういうことを韓国でやったような感じですね。幣原坦っていうのは。これ実は東京帝国大学国史学科の卒業生なんです。それのウチが一番年上ですね。ここはあんまりおつき合いはなかったですね。息子さんが二人みえてこれもあれです，幣原喜重郎がそうじゃないでしょうか，三菱と何かつながりがあったんじゃないでしょうか。三菱のお偉いさんか何かにもうなっているぐらいの感じであんまりおつき合いはなかった。二番目が田中さんで，これはもう…，末っ子が田中正俊さん。一番上の方は，これもその学会では知られてる西洋中世史をやって，最後は立教大学の先生だったかな，当時もう大学を卒業されて大学に残ってた，うんと年上の（人）。そのあと何人もいろんな方がいらっしゃる。それから一番末のお姉さんのご亭主が，その神田の町医者，私の病気を世話してくれた。そこはあのやっぱり，お医者さんになりましたね。そのお子さん方ね。是も一番末の弟さんが田中正俊さんと同級くらいでしょうか。やっぱり中学生，凛々しい中学生で，その二人はよく話があってたらしいですけれど，私なんか，ちょっとそれよりか子ども扱いでしたが，やっぱりいろんなことを知ってて，いかにもまさにあそこらからみたら田舎者だったんですね。都会人で…。

―神田のお医者さんはなんてお名前ですか。

山本さん。この従兄弟は一人生きてるんですねえ，今もね。鵠沼にちょっとした別荘がありまして，夏休みなんかそこへ呼ばれたりなんかしてましたけど，その鵠沼の別荘の辺りに今も健在なんですね。身体弱ってるでしょうけど。そういう従兄弟たちとはちょっと。年が違っているのもあったけど，ちょっとカルチャーショックみたいのはありましたね。

―そういうことに対して，当時はどんな感じを持ってらっしゃいましたか。反発みたいなものは？

反発なんてできなかったでしょうね。一つね，私の家の環境では親父の方が母親よりか，教育熱心だったんじゃないでしょうか。何か干渉が強くってね，父親の方がね。で，父親が（留学して）留守になってからは少し自由だったような感じがあるにはありますね。尾田のおじいさんとは家が近くでしてね，今なんて言うんだろ，中野区高根町って言うのかな，ちょっと坂登った，歩いて行き来できるところにお祖父さんが住んでて，そこが一番近い親戚で，よく行き来する（家）。そこにはウチの母親が長女ですから，やっぱ，その頃，田中正俊さんくらいかなあ，旧制高校を卒業した，大学生くらいだったかな，それくらいの人がいましてね，それは今も生きてます。最近ちょっと会いました。それと同じ感じだったかな，それは叔父になるわけですけど，叔父と従兄弟とは同じくらいの感じ，ちょっと年上かな，そっちの方が。

福岡へ帰る

―そういう東京時代を過ごして，また福岡にお父さんが帰ってきた九大に復帰されるとともにお帰りになったわけですね。

それから，さっきも言いましたように戦争の本格化，その影響がやっぱりもろに受けてますね。前の福岡時代からけっこう戦時体制のなかで少年期を送ってるって感じはあるんですね。「爆弾三勇士」あれなんか歌になってて，小学校の唱歌とは別に小さい頃みんな歌ってましたし，なんかあんな風になってくのがいいことなんだっていうような感じがあったけど，4年生ですか，盧溝橋事件があって，その頃やたら新聞をよく見てましたね。新聞見て，南京まであと何キロとかなんと

か。軍人になろうという気はあんまりなかった。どうしてでしょうね。ああ，それから親父が行った先がベルリンでしたから，しょっちゅうウチの親父はその点，マメでして，しょっちゅう絵葉書を送ってくれた。手紙をくれて，こっちもまたせっせと書いたんですけど，ヒトラーがのし上がってくる時期でしてね。ウチの親父はどうもかなりヒトラーにいかれてたようで，ヒトラーがのし上がって来る時代っていうのは一方でベルリンオリンピックの時代なんですね。ベルリンオリンピックはちょっとブーム，熱狂がありましてね，ベルリンオリンピックと中国の戦争とその二つで新聞をよく読んでたのかな。何かその両方が右翼的体質，福岡イズムみたいなのと親父のヒトラー，ベルリンオリンピック，日中戦争みんな組み合わさって右翼的体質を強めていったのかな。それでいて，右翼だけど軍国主義ではないというわけでもない，どういうんだろうなあ。

―ストレートに軍人を志向するわけではない。それは批判精神みたいなもの。

そうじゃないと思いますけどね。何となしにのらくろの漫画やら「小学校何年生」の兵隊の記録なんか見ると，兵隊になると困るなあ，という感じがありましたね。

―困る，というのは。

霜焼けがよくできたんですよ，満州に行ったら困る。服のボタンの掛け違いみたいのはよくやるんだし，兵隊になるのは恐いなあ，というような感じと，兵隊にならなくっちゃいけないんだなあ，という感じと混じりあってた感じですねえ。一方で唱歌なんかで与えられる当時の国史教育っていいましょうか，それモロに受けてそれとある種の読書欲とがつながっていたのかもしれません。今にして思うと「太平記」ですね，小学校の国史教育ってのは。じゃないかなあ。要するに吉野朝。なんかそんな本がシリーズであったんですね。小学生全集なんかと違って，小学生全集はより高級インテリの世界と違って，なんて言うかな，まさに小学館，講談社レベルでしょうかねえ，何かそんな本読んでた気がしますね。

―素直に時代の影響を受けたという感じになりますね，それは。兵隊にはなれないから，何になろう，とかは。

この前，ちょっと変なこと言いましたね，松村武雄（の肩書きをみて），文学博士になるなんてことは言った覚えがありますね。動物園の園長さんになりたいなんて言ってたこともあるんですけども，軍人，大将になるなんて思わなかったのはやっぱり友だちの中で大将になるなんて言ってた連中が強かったからかなあ。喧嘩で腕白大将みたいな連中はそういってて，そういうのとはちょっと違う。そういうことかな，よくわかりませんねえ。

だけど，これも附属小学校と桃園小学校で違ってましたねえ。桃園小学校では，「大きくなったら左官屋さんになる」なんて堂々と言ってる子がいましたねえ。

―お父さんのあとを継いで，ということですね。

そういう雰囲気ははねえ。それから中野は農村でなかった，って先ほど言ったけど，あちこちから来てる子がいましたね。地の人もいた反面ね，私がその福岡を威張ってると，信州の自慢する子がいたり，ね。

―どんどん，東京に人が集まる。そういう状況を郊外の学校である桃園小学校ということですね。

それから朝鮮人があの頃，中野にたくさんいたはずですけども，中野の学校にはいなかったのかな。中野は本当に，朝鮮人もいたし，それから，なんか文学青年か，性悪青年みたいな，若い，胡

散臭げな男がウロチョロしてたり，と思うと，カフェって言ったのかな，あの頃，厚化粧の女の人がいたり，奇妙な街だったような気がしますね。新開地ですかね。尾田のおじいさんなんかはそういうところの新住民だったんでしょうね。お屋敷街みたいのがちょっと出来てて，そこに住んでましたからね。

―そういう東京の暮らしが，お父さんが帰国されたことで，また福岡に戻ることになるわけですね。附属に戻られたんじゃなくて，今度は当仁小学校。

はい。唐人町なんですね，本当は中国人町なんです。小学校の名前も唐人って言葉を避けて，仁に当たるで，当仁。これ，附属小学校と割合近いところにあって，よく喧嘩してたんですよ。その多くは当仁の子が附属の子をいじめる，というかたち。当仁小学校ってのがこれまた，桃園小学校と似てるのかなあ，ほんと，幅があったんだなあ，あれ。やっぱり大学の先生の子どもなんかが入ってたけども，反面で，浜っ子っていうんですね，海岸の小漁民っていうかなあ，貧乏人（笑），貧民窟みたいな，海岸の一帯があって，そこから来る子どもが気が荒くって，どういうわけか，ボタンをとる。附属の子が通ってくのを襲って洋服のボタンをちぎってとっちゃうっていういじめですね。そういう感じの子どももいたし，朝鮮人もいましたね。それん中でなんかちょっと，さっきの東京への転校と逆で，東京から来た子っていうんで，カチンと来るんだ，福岡の人にとっては。

東京から来た子で，おまけにメガネなんかかけてて，私，メガネかけたの早いんです。東京の小学校へ行ってすぐにメガネかけた。メガネかけて東京から来て，お坊ちゃん。おまけに身体が弱いからっていうんで，体育を見てるとか，掃除をやらないとか，こりゃ，いじめられて当然ですね。

―いじめられました？

いじめられましたねえ。

―そうすると当仁小学校の時はあまり，いい思い出というのはないですか。もう小学校も終わりですが。

いくらかあの頃，受験勉強みたいのしてましたね。補習みたいの。

―成績は良かった？

そうですね。まあ，少なくともいい方ではありましたね。

―中学校の修猷館というのは，当時のエリート校。当仁小学校からは？

当仁小学校は附属小学校ほどじゃないけど，修猷館からはレベルの高い小学校と数えられていたようですね。浜っ子の世界もありますけど，基本的には住宅地の学区ですから。で，逆に修猷館ではある種の先生は当仁と附属から来る奴は生意気だってやっつけられましたね。現にそうだし，わかりますね，その先生の気持ちが。なんか家庭が比較的ハイレベルでそれだけ先生を尊敬していない，って感じだったんでしょう。まあ当仁の中でそういうタイプの人が修猷館に行ったんでしょうね。

―修猷館へ行くっていうのもお父さんの方針ですか。

そうねえ，でも福岡市内で，博多部は福中（福岡中学），福岡部は修猷館というのが多くの人たちにとって第一目標だったんじゃないでしょうか。それが出来る子が行く途っていうか。

―修猷館中学はいかがでしたか。もうだいぶ大人ですよね。

うーん，中学１年と５年がずいぶん違うと思います。中学１年はまだ子どもで，５年となると堂々

たる大人で，これが一緒になってたのが中学校であって，そして一面ではエリート教育ですね，中学は。商業学校や工業学校と違って，その違いというのは当時あんまり意識してなかったけども，ずいぶん大きな違いのようですね。学科も違うし，意識も違う。これは一面では軍国化って言うか，特に修猷館って学校は，右翼的な，硬派っていうか，福中の方が博多っ子，商人の町で，福岡は芸能界で活躍してる人がかなりよく出るんですが，まず，福中で，修猷館からはどうも，まじめっぽい（人ばかり）。

あの，私らのちょっと先輩あたりの世代が，中学校時代，印象に残ったこととして，ヒトラーユーゲントが学校にやってきて，初めて日本でハンドボールの試合をやったっていうことが，惨憺たる負けだったそうですが，それを小学校，当仁小学校の時ですが，見学に行ったんですよね。6年生で。で，ヒトラーユーゲントの若者と仲良くなっちゃったっていう雰囲気が私らの少し上の学年にあったんですねえ。

一方では私が後，大学や高校の教師をやる中で先輩として非常に世話になった，大学生時代にマルクスを読むことと，酒を飲むことを私に教えてくれた悪い先輩がいまして，―もう死にましたけど―彼なんかは中学生時代に日独伊三国同盟が成立の時に外務大臣宛に「バカヤロウ」なんていう電報を打ったという，そういう雰囲気ありましたね。

あの頃，二，三年の違いと家庭環境もあって，言うならば，今からの整理で言うと，大正デモクラシーみたいな雰囲気とそれを経験した人とそうした経験ヌキで幕末維新からファシズム体制に真っ直ぐ行った人と，混じり合ってたんでしょうねえ。私の学年じゃ大正デモクラシーの雰囲気を受けた人はもうごく例外的なものになっちゃって，少し前にはもう少しあったのかなという気が，高校や大学へ行ってからもしましたねえ。

その点で東京の成蹊とか成城とかいう旧制高校あるでしょう。ああいう質実剛健バンカラというのとは違うタイプの高校，それとかクリスチャンのところとか違うんでしょうねえ。

修猷館は先生は非常に優秀でした。優秀でない人もあったけど，優秀な人が多かったですね。それから，なんか一種の気概みたのがあったし，反面ではやはりバンカラ，というか，上級生が下級生を殴ったり，やっぱりこれは後から思うと先生の中で，軍国化に少々は抵抗し，消極的抵抗をした人もあるし，すっかり軍人になっちゃった人もある。両方あったような気がしますね。やたら生徒を殴る人，予備役少尉とか中尉とかいうのかな，配属将校ではなくて，教務の教師でね，意外に自由な人もあった。上級生とかでは，これは今の学生でも当てはまるんでしょうか，なんか3年生くらいが一番悪いんじゃないかなあ，1年生やなんかを殴ったりするのはね，5年生くらいになるとそういうのを制止しようとしたり，なったという気がしますね。そこに軍隊のあれが入ってきて，完全に今の運動部の一部がそうでしょうか，少しでも，一年でも上だったらもう，完全に生殺与奪を握っているという。これはもしかするとあれかな，あなた方の世界（民俗）で，村の若い衆仲間や何かとかなり関係するんでしょうかねえ。なんか中学校でも上級生と下級生との関係とね，軍隊の古年兵が威張ってる世界とね，それはちょっと違いがあるような気もするんですけど，上級生の方である制約が強くて自己統御みたいのが出来てくるんですね。

印象深いことで，中学で武道という教科があって，武道が柔道と剣道と選択になってるんですね。で，剣道を選ぶ人が3分の2くらいで，3分の1ぐらいが柔道やるんですけど，3分の1くらい柔

道選んだ中に私も入っていて，そうするとあのある時間に，昼休みか放課後か何かに，1年生の各教室を柔道部の連中が回って，「柔道選んだ者は道場に集まれ」ってみんな集めて，「柔道部に入る者は立て」って，ほとんど全員が立つんです。私は立たないで，しばらく立った連中を相手に，何かいろいろお説教をして，次に座ってるのに「きさん，なんごとすわっとるんとや！」って，分かりますか？

―「おまえ，なんで座ってるんだ」ですか。

「いや，ワタクシは身体が弱くって，静粛にしてなくっちゃいけないって言われてます」って，でもあの時は殴られはしなかったなあ。結局，それ見過ごしてくれたんじゃないかなあ。柔道部なんてのは部員が少なくて困ってたんじゃないかな。

何か，これは今の学校もそうだろうけど，運動部の勧誘がそれぞれあって，勧誘の手順が今みたいに，優しい勧誘じゃなくって，そういうかたちの勧誘で，中にはなんとなく入って上級生から痛めつけられても，部の先輩が押さえてくれるって，そんなんで選んだ奴もいた。荒っぽいです，あの頃全体的に修猷館ってのは荒っぽかったんじゃないかと思いますねえ。あの頃，修猷館で幅きかせてたのが，水泳とラグビーだったんでしょうね。水泳は例のベルリンオリンピックで優勝か，入賞かした葉室ってのがそこの卒業生でした。ラグビーがかなり強くって，で，またラグビーはもの凄く荒っぽかった。ラグビーの試合があると全員，応援に行けっていう，お達しが上級生から回ってきて，そして試合は日曜日か何かにやる。で，月曜日は恐怖の日でありまして，昼休みか何かに教室にどやどやっと入って来て，「昨日，応援行かんかった奴は立て」って，これ言い訳も何もあるもんじゃない，行かなかったって奴はみんな殴られるのが普通でありまして，なかには負けた後のシゴキは行った奴も「昨日の応援の仕方はきさんらなにしよるか」って殴られる。平手打ちででね，それは軍隊とはちがってね。殴られたことのない人はいなかったでしょうね。中には級長なんかやると，自分のせいじゃなくって「おまえのクラスはなんだ」って級長がみんなの代わりに殴られることなんかあったりなんかして，ね。

そういう運動部や何かが一切ないもんですから，今になると寂しいですねえ。

―で，何をしてらしたんですか。勉強以外の学校生活は。

家が海岸の近くだったもんですから，よくあの，潮干狩りっていうんじゃないけど，海岸で貝掘ったりなんかして遊んでましたね。あと，歴史に関連したことで言いますと，墓石が，無縁仏の墓石が海岸の防波堤に使われてましてね。今もあると思いますが，海岸に字を彫った墓石がゴロゴロ転がってるんです。海岸を通りながら，「これは享保何年だ」とか「これは元禄何年だ」とかいうのをメモしていくようなことをやったことがありますねえ，歴史に関係することでは。

もう一つ歴史に関連して傑作な話が，貝原益軒と平野国臣，どっちが偉いか，これを学校行く途中両方の何かがあったんです。貝原益軒の胸像があって，平野国臣は何があったのかな，どっちが偉いかと友達と議論して，まことに恥ずかしながら私は平野国臣が偉いといった覚えがあるんです，今にして思えば，何たる…って気がしますけど。

でも意外なことを教えてくれたもんだなあ，と後から思うのはね，教練の先生でね，先輩にあたるんでしょうね，生徒から教練の先生ってだいたい嫌われることが多いんですけど，生徒から慕われていた教練の先生で，昔の中学校，よくあれがあるんです，あの野外演習みたいのが。あれは本

当に勉強させられましたね。5万分の1の地図を見るのはそこで教わったんです。地図を見るだけじゃなくて，地図の読み方でしょうかね。ここはこんな地形だっていう。当時，それの中で，西南戦争の時に福岡で，西郷軍に呼応して決起しようとした連中がいて，それがここを通っていったなんて，そんな話をする人がいましたね。そういうのは福岡の歴史伝承のなかに残ってるんですね。

福岡色を強め過ぎちゃった話をしてるかなって気がするけど，何か他の人と違った経験っていうとそういうことになっちゃうのかなあ。

これも福岡の特殊性かな，修猷館ではいろんな人の講演会がありましたね。だいたい卒業生が多かった。これは今から思うとずいぶんハイレベル。今も私らよりむしろ若い人たちで優秀な卒業生がいて，そういう連中がちょいちょい講演をやるかに聞いてますけど，私なんかが聞いた講演でもね，広田弘毅も聞いたし，これもまた右翼的体質の話になっちゃうけど，私が感動したのは，とりわけ中野正剛でしたね。あれはやっぱりあの土地の名士でもあるし，かなり思想性を持ってましたね。中野正剛の，かなりよく出来ている伝記があるんです。その伝記ですと，東条（英機）と対立して，そして何か憲兵か何かから―最後に自決する寸前の逮捕じゃないと思いますけど―何かいっぺん，マークされて，それ以後，公の場で話をすることは止めた，と。ただ例外的に母校で政治に関係ない話をした，とこういう記述になってるんですけど，私，母校でその政治に関係ない話をした，というのを聞いてるんですけど，関係ないどころじゃない，凄かったです，あれは。あのね，八百屋のおっさんとか魚屋のおっさんとかいうのがちゃんと商売やってたのに，それがある日突然，何か大政翼賛会かなにかに入っちゃって，がんじがらめになってるって話，しまして，同時に鉄鋼生産量がアメリカはどれだけ，ソビエトはどれだけ，日本はどれだけ。で，日本は非常に低い位置にあるなんてことを言ったりしまして，そして結論みたいなものとして諸君はとにかく安易な道を選んではいけない，というようなまことに熱血あふれる大演説でした。あれは響きましたねえ。

中学生生活

あ，それからこれが一番大事なことかもしれませんが，私，中学生時代，そういう学校でもあるし，私の家の空気がそうですから，まともな読書みたいのほとんどやってないんです。端的に言うと岩波文庫ってものの存在を知らない。それを（もう）知ってるの（人）がありました，私らの同級生で。岩波文庫ってものの存在を知ってて読んでた人が何人かいることは後で知りました。私は知らなかった。岩波文庫を全然知らなかった。その方が多数だったと思いますよ。で，何を読んだかっていうと，これは私の特殊性なのかもしれません。文部省教学局から出ていた日本精神叢書とかいう文庫本の，―家に少しありますから興味があれば持ってきてもいいんですけど―それで，要するに『太平記』だとか，あの祝詞だとか『古事記』だとかで一冊になっている。書いている人は当時としては一流の学者で，そしてある程度分かり易く書いてある。悪い本じゃないんですけど，要するに日本精神昂揚みたいなものを目的としている。そういうものをかなり読んでました。というのはさっき言いました吉野朝あたりの話が教科書に出てきて，その延長で，吉野朝の悲劇とかそういう類のを小学生の時に読んでた。その延長じゃないかと思うんですね。それからもう一つが柳田国男がちょっと入ってくるんですね。あのこれは教科書ではなくって新聞，朝日新聞の，家でとってた，というのはちょっとインテリ家庭になるかな。朝日新聞で「子ども風土記」って子ども向けの

連載してまして，それが大変面白かったんで，それの延長で，少し，自分で買った覚えはないけれど，見た覚えはあります。その他には，当時のベストセラーの戦記物ですね。例えば，あの頃の人がよく読んだのは『ノロ高地』，あのノモンハンの戦争の，ノモンハン事件に参加した将校が戦争の記録を書いたもの，ベストセラーでした。そんなのを読んだ。ともかく岩波文庫の存在は知らないっていう位，思想的なものは全くない，その中で中野正剛の話は思想でした。

それからもう一つこれは意外に思われるかもしれませんが，教科書の中で思想を学んだのが，一つは漢文で，一つは英文。英語の教科書以外に修猷館は優秀な先生がいたんでしょうか，その先生が自分で作った英文解釈何とかっていう奴，いろんなカーライルだとかシェイクスピアだとか，そういう人の文章をチョロチョロっと引いて，それで何か英文の言い回しとかを例にした，そういう中に何か，例えば「現代において必要なのは，より多くの読書じゃなくて，より少ない読書とより多くのシンキングである」といったような，その類の箴言っていいましょうかね，そういうのがやたらと出てくる，これと漢文で，特にあの孟子の系列と私は理解しているんですが，そういうものとが案外，思想形成には働いたように思います。実はあの，お得意の話になっちゃうんですけど，中学の4年生で高等学校みんな受けるんです。入るのは本当にごく少数で，私も受けて，もちろん落ちて，5年になるちょっとしたところで文科系徴兵猶予撤廃と，4年の時，文科受けた人もそこでサッと理科に転向していくんですね。そういう中で文科選んだのは我ながら立派だったと言えるかどうか（笑）。何か担任の先生が「陸士や海兵っていうのが一番偉いんだ。身体弱い奴はしょうがないから理科へ行って飛行機を作れ。」というのに対して「戦争は武器と兵隊だけでやるもんじゃあない。」なんてことを反論しまして，楯突いたというか，そういうのがありました。その「戦争は武器とあれだけでやるもんじゃない」っていったような思想は孟子だった，と思います。「王道と覇道」というか，あるいは中野正剛も入ったかもしれません。孟子と頼山陽なんてのはもちろんたくさん出ましたけど，けれどそんなに。頼山陽は「耶馬渓に遊ぶ記」なんていう旅行文は面白かったけれど，吉野朝にいかれてたわりには「楠公の話」なんていうのはあんまり印象に残ってなくて，それから案外あの，本居宣長。古文で本居宣長がちらちら出たり，そんなのが，ある思想（の影響）は受けたのかなという気がしますね。

受けた思想は戦争反対にはいかないんで，戦争反対にはいかないんだけど，そうです，あのいろんな講演の中で，軍人さんの講演もありまして，あれは正直な人だったと思うけど，戦争ってのは要するに，モノの取り合いなんだ，みたいな極めてドライな話をした人があって，それには反発しましたね。何かそういう感じはありましたね。ですから何か聖戦，東洋永和のための神聖な戦いだ，それから大東亜共栄圏っていうのは素晴らしいもんだ，っていうようなそういう理想化が自分の中でされていたのは，やっぱり覇道に対する王道精神みたいなのにつながって，自分で考えたんじゃなくて。

それからもう一つはあれですね。やたらあの上級生が下級生を殴るっていうのとは異質のものとして，軍人が殴るっていうのがよくありました。配属将校，でもいろんな人がいたけど，ある種の配属将校は自ら手を下して殴りましたし，その配下にある予備役の将校か何かで，中国戦線に従軍してきた奴が殴ったし，それを受けて予科錬に行くとか軍の学校に行く連中が，「軍の学校に行かない奴は立て」なんて調子で殴ったりしたことはありましたし，その殴り方たるや，ちょっと，さっ

きの一般的な上級生が下級生を殴るなんてようなのとは違ったように思いました。そして兵営宿泊ってのがあるんです。兵営に一週間，宿泊する。で，兵営ではやっぱ，中学生っていうとお客さんだったんですけど，でもあの，兵隊が他の兵隊から殴られているのは見るは見ましたし，そういうのに対する，それを肯定する感情の人と反発する感情の人と，その分かれはあったような気がします。ですからちょいちょい言うんですけど，戦争っていうのは，中学生，それも戦争が激化したのが，昭和16年12月が，確か3年生ですから，そのあたりの中学生ですと，中学生より上の人も含めてですけど，あの時期の行き方で，一番左翼って言いましょうか，とにかく戦争そのものに反対である，という人たちがあり得たんですけど，これが表面には全くゼロでした。あったとしても少数でしかも隠れていた。その次にその正反対のところで，戦争賛成で軍人万歳，上官が下の者を殴るのは当然である。と。その間に，戦争は賛成だけど，やたらと殴る軍人はよろしくない，人を殺すのはよろしくない。4段階以上に分かれていた。世界情勢とか何かによく通じていて，しかも人間的な感情を失っていない，というのが一番いい形なんですけど，これは残念ながらなかった。反対に両方，完全になくした人っていうのがかなりあった。それから後の整理ですけど，極端な例でいうと，戦争は悪い戦争で理解していながら，人間的な心情をなくした人がいる。これはあった，と思います。満鉄なんかに行った人の中にはそれがあるんじゃないか。私の場合は戦争に対する批判とか反対とかいう空気を持ってた。反軍的っていうか，やたらと人を殴る軍人に対する漠然たる反感みたいなものは持ってた。幸いにウチの親からも（そういった点を）受け継いでいることができたと思うんです。そこのところは個々の人がどうなってるかは難しいですけれど，私の場合はそういうことのように思います。それはこれから，今の問題でもあるような気もしますけどね。何か善意だけで戦争を防げるもんじゃないとは思いますけど，やっぱり一番のところはそういうところの思いが，やっぱ平和運動なんか後にやったりしても，気になってますね。

あの防空演習みたいなもの，中学生は警防団っていったかしら，在郷軍人会なんかに直結した市民団体が「空襲警報発令」なんて言ってみんなに避難をすすめるとか，場合によっては贅沢は敵だ，っていうような運動をやるとか，その先兵みたいな形で中学生が使われてまして，防空演習の中で「敵機来襲，みんな防空壕に入れ」みたいなことを各家々に回って呼びかけるじゃなくて，強制するような，そんな仕事を任された時に，何か本当に困っている家があって，見逃したりしたような覚えがあります。で，それを支えてくれた先生もあったように思います。そんなことは見つかったら，殴られるような先生もあったように思いますねえ。これは高校教員なんかの世界でもあったでしょうね。これは戦争中の体験ともいろいろなかたちでかかわる，と思うけど，そういう目でみたらどうなんでしょうね。

あ，ただ，さっき言いました文科系を選んだ時の環境というのはかなりいろいろで，一つにはそういう選び方をする際に，理科系に行ったら戦争には，軍隊には行かなくてすむ可能性が大きいけど，文科系だったら，やっぱり戦争に行くことになるだろう。そこで死ぬことになるかもしれない，その可能性をある程度，考えましたが，それはまだ甘くて，いくらかの可能性があるという程度。それが昭和20年になったらそれはもう可能性じゃなくって，そうでない可能性がどれだけ残されているかになってきますけど。少し怖さみたいなのがありながら，やっぱり，「兵隊に行って死ぬかもしれないなあ。だけどまあ，好きなことをやる方がいいや」みたいなところはありました

ねえ。ただ，偉そうなことを言えたんじゃないのは，文科系を選ぶ中にも少数ありました，私だけでなくてね，文科系選ぶ人が。その中にやっぱり「死ぬかもしれないけど，好きな勉強をしたい。」っていうのがあったようにも思います。そうじゃなかった，私の場合ね。それほど純粋でもなかったように思いますね。一面では軍隊の方を選んだ人の中にも本当に純粋っていうか，「これは負けるから，予科練に行って飛行機に乗って何とか」っていう人もあったけど，どうせ兵隊に取られるんなら，兵隊に取られたら最初は初年兵で上官から殴られるけども，予科練に行けば，ちょっとの訓練ですぐに下士官になるし，士官学校，兵学校へ行けばすぐに少尉になるし，ってんでそっちの方がいい，と（いう人もいた）。これは教練の教官自身がそういう指導をしていましたね，ある程度。それからやっぱ軍隊に行ったら，だんだん食べ物が悪くなってきた時で，軍隊へ行ったら食べ物がいっぱいあるなんて空気もあったし，軍の方へいった人でもいろいろあったと思います。そんな中でやっぱり戦争に行って死ぬかもしれないってことをある程度覚悟しながら文科を選んだ，というのは，ちょっと威張れることかもしれないけど，現実は純粋な学問的なアレじゃなかったというのは，理由の一つは，証拠の一つは，高等学校の第二志望に，多くの場合は高等商業なんですね，第二志望は。何か私，それ嫌いでして，商業への賤視みたいな感じがあったのかな，士族意識でしょうかねえ。王道と覇道，王道には商業は入らないんだなあ，網野（善彦）なんかに叱られそうだけど。で，第二志望が外大，外語学校。それはねえ，何か変なトリキスタンか何か？，インド語科。それは幸い高等学校受かったから願書出しただけで受験もしないですんだけど，そういうことありましたね。司馬遼太郎なんかも，あるいはそういう人だったのかもしれませんね。外語でモンゴル語でしょう。あの頃はフォークロアもそうですけど，エスノロジーもほとんど学問としてオーソドックスなもの（教育研究機関）を持ってなかった中で，そういう関心はあったんですね，やっぱり。

あの何か大東亜共栄圏の中で，ちらちらと仏印の現状とか，南洋の現状とかそんな本があったりして，そんなのちょろちょろ覗いてみたりしてたんでしょうね。関心はありましたね。それは人類学そのものがそうかもしれませんけど，植民地を支配するための関心だったんでしょうけどもね。でも何か武力で支配するんじゃなくて，ね，というふうな感じがしてたんでしょうね。

まあ，なんのことはない，こっちは，武力を，柔道も，学科として柔道を選んでても柔道はロクにうまくなれないし，所詮，口舌の徒みたいな，運命にあったからそうなのかもしれないけど。

進路の選択

―そういう進路の選択に理科のお父さんの希望などはなかったのですか。

兄貴は親父のアレが強かったようですね。私の場合はね，文科は容認してましたね。これは幸いにしてかどうか，親父が台湾に行きましてね。九大の万年助教授みたいなのが，台北に工学部ができるというんで，台北大学工学部教授になって，これも台北大学の教官予定者が潜水艦で沈んで死んじゃったりしてるなかで，兄貴が高校に進学する昭和18年に台北に行ったんだな。ですから学徒動員で，文科系徴兵猶予撤廃って時は，もう親父はいないんです，ウチには。単身赴任ですけど，最初は。驚くべきことに，それからもっと戦争がひどくなってから弟や母は行ったんです（台湾に）。兄貴と私だけ取り残された。それで，だけど，親父に「文科系受けます」って言ったら親父がほめてくれたような感じがありました。台北での学生は文科の連中が，自棄酒飲んでるって。

ただ，一面で，高校出て大学入る時は，親父は帰ってきたすぐで，昭和22年，帰ってきてすぐに「文学部に行く」ったら親父が，反対をしたんです。反対はしたけど，その頃になると親父は弱っていたし，私も生意気になっていたから，強くは反対しなかったけども，反対したわけの一つに何か，塚本の明籌さんと法科に出すという約束があると，ぼやいてました。塚本の明籌さんの跡を，みたいなそういうことなんじゃないでしょうかね。

―塚本家とは当時，連絡などは。

ああ，これがまたひどい話でしてね。塚本明籌ってのは昭和20年の8月16日か17日に死んでるんです。それを私はちょっと後になって知りました。敗戦前後に知って，それもほっといたんですね。病気ではあったでしょうけど，戦災で家が焼けて，そうしてる中で死んだんですね。死ぬ前にちょっと時間がかかった，知らなかったですけどね。

―それじゃ塚本家とは，本当に家名を受け継いだだけ，ということになりますね。

そういうことになりましょうかねえ。

―何か急速にその大正デモクラシーの明るい雰囲気が，すぅっと戦争の直前で暗くなっていく，という感じがお話を聞いていると感じます。

うーん，別に暗くなったとは思っていなかったけども，後からみるとそうなんでしょうねえ。親父の場合も高等学校の第二志望に何をするかなんて相談をした覚えがあるんですが，その時に，建国大学，満州の，を挙げたら親父が反対しましてね。何か親父は何か反軍国主義みたいなところあったのかもしれませんね。本当にちょっとした選択で人生ずいぶん動いたもんでしてね。いや高等学校の文科の志望者が減ってて，一方，定員も激減したんですね，3分の1にした。不要不急の学科って扱い。だけど志望者の減少はもっとだったでしょうね。ですから中学でそんなに悪い方じゃなかったけど，そんなに良い方でもなくって高等学校に入るのはちょっと番狂わせみたいな感じじゃなかったかなあ。それは理科に多くの人が行っちゃったから入れたんだっていう，自分で言ってますけど，どうかな，わからないな。いや私は案外，理科は出来てたんですけど，数学，代数なんかは好きでしたね。理科に不適当なのは，文科でもそうかもしれませんけど，まさに不器用で，図が描けない。化学はいいけど，物理学，いろんな装置がある，あれダメでしたね。ただ代数は出来てたし，入学試験でも数学は確かほとんど満点だったように思います。案外，英語は終わりになると全然出来てない。入学試験っていうのは偶然性にも左右されますから，こっちの得手の問題が出たってことで入れたのかもしれない。やっぱり文科に行って良かったと思いますね。何か，そして文科の中には理科を軽蔑する，軍隊を軽蔑するそういうことがありましたね。そこにすっと乗ってけましたね。

―中学の時に影響を受けた先生はいらしゃいますか。

うーん，いろんな方がいらしたと思いますけど。国文法が好きでしてね。國學院か何か出られた，神職の方でしょうか，国文法の先生を困らせる質問をするのが大好きでしてね。一生懸命，文法なんていうのは例外が探していくとあるでしょ。探してきちゃあ，しょっちゅう質問してましたねえ。よく応対してくれて，ね。

先ほどの英文解釈の本を書かれた（先生），これは珍しく，東大の法学部を出て英語の先生をしてらした，英文が好きで好きでたまらない感じでしたねえ。よく叱られたけど案外，思想を教わっ

た，という感じがします，さっきも言ったように。漢文は好きだったんだけど…修猷館はもともと漢文を得意とする学校の筈なんですけども，どうしたもんだが…。学科は不得手でしたけど極めて印象的な先生では柔道の先生。これがまた不思議なことに柔道と書道を教えてました。どちらも私は大変苦手だったんですけど，印象的でしたね。何ていうのかな，国士だけど右翼じゃないっていうような感じでしたね。堂々としていて。よく覚えています。

それから生物が案外好きでしたね。生物って博物って言ったかな。動物，植物，それから鉱物…。やっぱり動物が好きでね。これはどっかにノートがあった筈ですが，あの「九州にはどんな動物がいるか」なんて話をしてくれましてね。それから動物についての諺やなんかを調べてこい，なんていう宿題が出たり，これは好きでしたね。「九州で熊はどこどこに」とか当時としてはそんな，そんな知識は教科書に載ってたのかなあ。載ってないんじゃないかなあ。そんなのも好きだったけど。

中学時代，いろいろな経験をしたようでいて，ちょっとひねてたのかなあ。勉強ばっかりしてたわけじゃないけど，勉強以外のことにあんまり…。ああ，家に僅かな庭ですけど，そこに野菜植えたり，花植えたり，それは好きでしたね。それから要するに畑，畑仕事。あれは，最初は嫌いだったけど，好きでしたね。農作業自身はね。それから中学の時は私は勤労奉仕をずいぶんやった。その勤労奉仕の，志賀島での作業があって，要するにモッコかつぎ。土を入れて運ぶ。農家の勤労奉仕もありました。出征軍人を出した農家に行く。田植みたいな技術を要するのには（中学生は）使えなくって，菜種打ちをよくやりましたね。ご馳走になるんで，楽しかった。ご馳走っていったって大したものは出ないけど，あの当時としては。もうだんだん腹へらしている頃ですから。一回だけですけど炭坑に入ったこともあります。福岡市の西の方に小さな炭坑があって，これはモッコ運びくらいのことですね。ツルハシ持って…土運びくらいのことなんでしょうけど，何か強烈でしたね，印象が。本当に真っ黒けで裸で働いて，そして男と女が一緒に働いているわけなんで，かなりちょっとエロチックな面もあったりして，終わったところで風呂に入るんですけど，風呂がひどいもんで，入ることによってかえって体が黒くなる。先生がちょっといかんと思ったのか，一日で止めになっちゃった。炭坑自身から言ったら本当に入り口のところだったんでしょうけどね。ただ農家に，あの頃の福岡辺りだと農家に行きますとね，表彰状みたいのがずらっと長押にかかってた，それで農家の人は農閑期は炭坑で働いていたのかなあ，炭坑での皆勤賞みたいなのがちょいちょいありましたね。ですからそれほど，遠い存在じゃなかったのかもしれません。私はその辺がちょっと曖昧ですけど。

勤労奉仕ではいろいろありましたよ。自動車ですね，乗用車。乗用車はその頃少なかったんですけど，何か乗用車を壊してそこから何か部品を取り出す作業をやった覚えがあります。それを理科に行って航空関係のことやなんかやってる奴は後からそれをきれいに説明してくれました。こっちは未だ分からない。それから防空演習，その合間に勉強してたんですねえ。

―それから高等学校を受験されるんですが，ハ類というのは何ですか。文甲というのは。

正常な状態での旧制高校ですね，その戦時体制に入る前の旧制高校は理科と文科とまずは，同数の学生で，だいたい多くの高校は，ですね。そしてどこも甲は英語を主体とした（コース）。文科で英語を主体としたのが文甲で，理科で英語を主体としたのが理甲で，乙はこれもだいたい共通だと思います，ドイツ語。理科も文科も乙はドイツ語。で，丙というのが，福岡の場合には丙があり

まして，丙が理科にはないと思いました，文科では，福岡では文科の丙はフランス語。これが多くのかたちだったでしょうか，高校によっては丙がフランス語じゃなくて他の外国語だったところもあるかに聞きましたけど，よく知りません。

で，戦時体制になっていくなかで理科はそのまま，っていうか，特に理甲を膨らませました。理科が平常な状態だったら3組だったのが，5組になって，5組で…理乙がご存知と思いますけど，医学と農学，医と農が乙です。文科の方は甲乙丙のなかで丙がまず完全に潰されました。あのフランス語を第二学国語，もしくは第一外国語とする学科は私どもが入る1年か2年前になくなりました。そしてでも3つ残そうという苦肉の策でしょうか，あの日本古典中心なんていう不毛なのを作りまして，それをロ（類）にした。ですから文科のイ類っていうのが文甲の後で，ロ類がその古典。ハ類は文乙の後身で（ドイツ語をやる）。ドイツ語ですけどもかつてはそれが一組あったのが，イロハひっくるめて一組になった。10人づつですから組というわけにいかないもんで。(6)

ただ，気の毒だったのは文丙でドッペった（落第した）連中。本当に苦しんでいたようですね。苦労してドイツ語やったりとか。中には中学でフランス語やってるのがあったでしょ，暁星とか。そこ出て福岡の丙に来た人があってドッペって苦労してたですねえ。文丙は一番，反体制的な強さを残していたと聞いてますね。軍事教練，野外教練なんかは文甲や文乙の奴らは軍歌を歌って行進するのにフランス語の連中は何か流行歌かなにか歌っていたっていう話もあります。だいたい甲と乙とは甲が経済で，乙が裁判とか司法官とかが多かったでしょうかね。どうも私の頃になるとそういうのはどうでもよくなっちゃったようですけども。何か今の行政改革と同じように，縮小しても元の形は残しておこうっていう苦労の産物だと思いますね。

（私たちの学年は）ドッペってきた人があったりして人数が少し多かった。そしてそれの中で浪人してきた人は入ってすぐにもう兵隊にいっちゃう人もいたし，でも高等学校は本当にカルチャーショックでした。

―高校では寮に入るんですね。

そうですね。親のアレから独立するんですね。自由とか自治とかいう観念は生きてましたし，ね。軍人を軽蔑する，という空気もありますね。カルチャーショックでしたね。

―寮はどこにあったんですか。

今は街中になっちゃってますけど，当時は外れですね。大濠公園お分かりでしょうか。大濠公園の南側，市街地と反対側です。九大の教養部が今あるんだけど，九大全体が移転するなかでもう何もなくなっちゃう。

―高校に入られた時は，その先，大学のことなどは考えていらっしゃいましたか。

あんまり考えてなかったですね。戦争行かなきゃならないっていうのはどのくらいまで意識してたか，ちょっと不確かですねえ，我ながら。後から考えると陸士や海兵に行った人よりか早かったはずですけどね。戦場に出るのは。ただ，予科練に行ったのは，いや私の同級生で予科練へ行って戦死したのがいますから，予科練とかいろんな形で兵隊にとってったでしょう。そういうなかですぐにもう戦場へ持ってかれるような気がしてましたから，それよりかちょっと余裕があるなって感じがしてましたけど，ちょっとがどのくらいちょっとなのか，意識したか分からないねえ。

（2003年5月6日，歴博にて）

若干の補足

前回の補足をしておきますと，塚本明籌，養父にあたるのはちょっと調べてみますと1870年生まれですから，亡くなったのがちょうど今の私くらいの歳になるのかなあ。1945年に死んでますから，75で死んだのか。私が一応，跡を継いだ形になった時は60をこえてるかな。実の親父よりも二十何年か年上ですね。本当に知らないおじいさんっていう感じでなつきも何もしなかったっていう，悪いことしたような感じしてますけど。

それからあの中学時代にほとんど本読んでなかったっていうのは事実には違いありませんけども，ちょっと曲げたかと思うのは変な本を読んでます，後から考えると。あの，親父が，親父はあまり本読んでなかったと思いますけど，いくらか家に本がありましてね，特にあの変わったっていうか，倉田百三なんていうの，親父の本でざっと中学生の時にのぞいてはいました。『愛と認識との出発』ですかね，あれ何かのぞいてショックを受けましたね。性欲ってものを自覚してくる時期で…。それから親父の本は奇妙なあれですね。親父は法華経の信者でしてね，あの「法華経講座」なんていうのがありまして，それを，親父は，それに兄貴がそれにのってたんだな。何か家族で講義するようなことやってまして，ちょっとのぞいたりしたんだけど，これはどのくらい自分の後に響いてるか全く分かりませんけどね。それから奇妙な本がありましたねえ，書斎なんてものがあるわけじゃない，書棚があるわけじゃないんですけど，ポツンポツンとその「法華経講座」以外にも変わった本があったのが，一つは倉田百三で，それから白柳秀湖。後から考えると，今から思うと注目すべき人物のような気がしますけど，その頃は何にもなしで，何かやっぱり，ちらちら見てましたね。白柳秀湖があり，倉田百三があり，っていうあたりはちょっとこの前言った話とは違うことになりますね。あと何があったかなあ，そんな感じで読んだのは，…変な本です，とにかく。倉田百三くらいがその頃の中学生で，よく本を読む人にとっては郷愁の読書になるのかもしれませんけどね。あとは，うんと変わったとこでは『ロビンソン・クルーソー』の原書がありましてね，これが中学生で夏休みか何かで一念発起して読もうと志して，英語の辞書を片手にポツポツ読んでいったら，えー，ロビンソンが海に出る前のところで終わっちゃった（笑）。何かちょっとショックを受けましたね。世の中に中産階級ほど，いいものはない，なんてことを綿々と親父から話を聞くっていう中味なんですね。初めのかなりの部分はね。かなりの部分がそうなんですねえ。それから何かあったかなあ，他に。

この前言いました，幣原坦っていう，あの親父のこれも塚本明籌とほとんど同じくらいの歳でしょうかねえ，姉の連れ合い，親父の保護者みたいな人ですけども，その人の書いた，幣原坦ってのはあの，日本史学界では南方史の，つまり私も大学で教わった岩生成一先生とかああいう先生の先輩みたいな位置なんですけど，初めはこの前，ちょっと言いましたように韓国，併合前の韓国で仕事していて日朝関係史か，今でいうと日朝関係史か，韓国史みたいなことをやってた。で，韓国史の本がちょっとありましたね。ちょっとって一冊だったと思いますけど，それをちょっとのぞいたりしましたね。それからこれはかなり多くの人があの頃読んだのかもしれませんけど，大川周明，あれの何か『日本二千六百年史』とか，それから何ていいましたっけねえ，あの『米英亜細亜侵略史』って言ったかな，何かそういう類の本。そんなのを読みましたね。これも右翼調ですね，完全に。

それからまた，うんと変わった本ではあの，大槻如電ですか，如電じゃなくて如電の兄弟，何て

言いましたっけ，やっぱ如電かな。大槻如電のあの，『皇国史』，天皇の皇を書いた皇（コウ）ですね。そういう変わった本がありまして，これは大槻家と熊沢家，塚本家とが何かずっと，熊沢の家は三代にわたって大槻の門下だったっていう伝えがあるのかな。何か，祖母が生きてましたから，祖母が大槻如電さんと年賀状のやりとりくらいしてたんでしょうかねえ，そんな関係で確か大槻さんから頂いた本だと思いますけど，その『皇国史』みたいな本があの，これはあれです，あの今もどこかにあるんでしょうねえ，『古事記』みたいな文体で漢字，和風漢文。漢字で仮名を表すようなそういうのを交えた木版の本でしたけどね。これが意外に新鮮な本でしたね。例えば日本人は北方から来たか，南方から来たか，なんていうそういう議論が入ってまして，私の今の理解で言うとボキャブラリーの上では南方が強くって，文法の方では北方が強い，っていうのは南方民がやってきて，北方民がこれを征服したからだっていったような議論が中にあったような，『皇国史』って言っても皇道史観とはちょっと違ったものだったように思いましたけどね。そんなのがちょろちょろありましたね。

あの従兄弟たちのように小学生全集とか，何かで外国文学にふれるとか，そういう読書はしてないってことであって，変わった本は親父を通じて若干は知ってるんですね，後から思うと。それがどのくらい後に響いてるかわかりませんけど。

―そういうのはお父さんの蔵書としては異端ですよね，お父さんは理系ですから。

大槻家との関係はおっしゃるように全く異質でしょうね。ただ大槻との関係とか幣原との関係とかそういう個人的なつながり以外のところでは，法華経信仰みたいなものは親父の青春時代の精神史みたいなものの，倉田百三なんかはそれで入ってるんだと思いますけどね。何か親父はあの耶蘇って言いましたけど，耶蘇嫌いで，九大の上司が，これは日本のキリスト教史ではちょっと意味持ってるくらいの熱心なキリスト教徒が上司でしてね，それを何か，「あいつ，耶蘇で」とか何とかってしきりと悪口言ってました。ただあの頃の青年ですとキリスト教ってのをちょっとこう，対決すべきっていうか，それ，キリスト教との対決の中で法華経信仰っていうことだった。そんなのと倉田百三とが入ってくる理由になってくるのかもしれない，と後から思いますけど。

―御家庭でお父さんの本をあれえっていって引っぱり出して読むことということは割と多かったわけですか。

そんなに本がなかったですから。（兄弟のなかでそういう志向は）私が強いかもしれませんね。

―御兄弟のことを中学以降うかがってませんが，もう別々の人生という感じでしょうか。

それはそうですねえ。

―御兄弟との思い出は。

兄とも弟ともよく喧嘩しましたけど，何か本読むのが好きだったのは私だったことは間違いないですね。

高等学校の経験

―この間，高校のハ類の話を聞きました。新制大学で言えば教養部。家を離れて入寮するんですよね。どういう気分だったんでしょうか。

親父が台湾に行っちゃって，数ヶ月ですけど母子家庭みたいな雰囲気がありましたから，家離れ

るっていうのは，兄貴も高等学校に入って寮に入ってましたから，家の中では私が高等学校に入る直前には家の中で保護される人間じゃなくって，やや母親なんかからも頼られるような人間になってたもんですから，そう家を離れることの悲壮感みたいのはなかったように思います。

ただ，学校の雰囲気はガラリと変わったわけで，例えば岩波文庫を知らなかった少年が入ってみるとそんなのかなり読んでるような連中に取り囲まれるっていうようなことをはじめとして，大変な文化ショックでした。それから考えてみますと，何か中学時代をこの前ちょっとバンカラ面を強調して話したような気がしますけど，中学の1年から5年までの間ってのは，低学年の方では腕白小僧からそのまま成り上がったみたいな，体力のある人間が仲間のリーダーになっていて，上級になるにつれてそれが多少知的なリーダーに変わっていくっていうような変化が，まあどこでも中学1年から5年までの制度ですとあったんじゃないかと思うんですけどねえ。それが戦争中で，またあの軍人が最高のトップ，一番偉いものとされてた時代である。さらに加えて，ややバンカラな質実剛健を旨とする学校の空気というのもあって，何か中学のなかで，そういう体育会系というんでしょうか，今のことばに翻訳すれば体育会系だけれども，当時のあれでいうと，軍人的な，体力と軍人というのかな，それを中心にした連中が大きく幅をきかせているなかで，比較的少数の，たぶん岩波文庫なんていうのに慣れているような文人派っていうのが何か，連中があった。それを私は不幸にしてそういう仲間に入りきれなくって，そういう連中との接触は少なかったんですけど，だんだんその雰囲気がわかってきたような変化は上級生になるにつれてあって，学校の中で私，こないだ言わなかったかなあ，中学でも不器用さと虚弱児童みたいな言い方をちょっとしたかしらね。その虚弱児童的なところと不器用さとがあいまって，ずいぶんみじめな中学生時代を送ってきたような気がするんです。端的に表現するならば，教室で小便もらしちゃったことがあるんです。これはもう，本当にいじめられっ子，みたいな位置にふさわしい。そういうところから中学4年，5年でかなり成績が良くなってきたように思います。で，4年，5年になるにつれて，やっぱり体育会系っていうか，運動的な能力じゃなくって知的な能力の方が重んぜられるようになっていく空気のなかで，少しこう建て直しが出来てったのかなあ，って気がするんですけど。自分に自信が持ててきたって言うかなあ。その雰囲気が高等学校入ると，まさにそういう連中ばっかりになっちゃうような感じなんですねえ。高等学校でも体力で大学あたりにいっても負けないってくらいの連中もいたにはいましたけども，それはむしろ脇に置いて，そうじゃない方で活動するんですね。あの勉強もできるし運動もできるって連中も，勉強できる方って言ってもペーパーテストじゃなくて読書力とか，その方が表に出ちゃうもんですからね。ですから高等学校入って，今まで自分が主役になれなかった場面の，主役になれるようなところに入っていれば，中学校の時に，本当はもうちょっと入ってればその変化のショックは少なかったかもしれませんけど，私の場合，そういうグループに属してなかったような感じがあったものですから，一層刺激が大きかったのかもしれませんが。

まあそれ以上にやっぱり，高等学校っていうものは戦争中にも，ある程度その寮で自治自由っていうのを盛んに強調してたのはどこでもそうでしょうけど，わが学校でも強く残ってましたね。中学では自由ってコトバは悪っていうイメージだったですねえ。当時は日本がそうだったですねえ。それがひっくり返っちゃったっていう。とにかく大変，本読んでる奴が，特に先輩には多くって，そのショックは大きかったですねえ。数ヶ月に過ぎないんですけどね，そういうショックを受けた

時期っていうのは。ショックを受けたっていうか，そういうふうにしてつまりお渡しした戦災の記録のなかにも書いたんですけど，夏休みになるともう２年生は全部工場に行っちゃうし，２学期になったらこっちも工場へ行っちゃうっていう塩梅で，平和な学校生活っていうには３ヶ月に過ぎないんですけど，その３ヶ月のあの変化はもう，革命的，でしたね。おそらく，今の方々の高校から教養部に入ったっていう時期と，遙かに大きいと思いますね。今の方々でも高校と教養部との間で，高校の雰囲気次第では似たようなショックの方，いらっしゃるかもしれませんけど。おそらく，そのほとんど大学に進学しないような高校からポッと大学の教養部に入ってきた人のショックの，それの拡張された，非常に大きなかたちになったものを思い浮かべればいくらか近いかもしれませんが。

―それは授業以外の日常の端々で感じられていたんですか。

そうですねえ。何か，規則を守らなくちゃいけない，というそれでずーっと通してきた人間だったわけですけど，高等学校の寮では，学校当局に対する反感みたいなのがあって，授業さぼることなんかは悪いことじゃない，っていう空気があったりしましたしね。そこにやっぱり初め，ちょっと反発したりしまして，そのうちやっぱり本当に，ナントカって言いましたねえ，昔の高等学校で使うことば，意欲って言葉ですね。意欲があれば意欲に応じて動いていけばいいんだっていう，そういう心情みたいなのが高等学校の生徒の心情で，例えば，何時からこう講義がある。それに出るのが当たり前だっていう時も，本当に意欲を持って何か本読んでて，そこから放せないって時には（さぼってもよろしい）。

旧制高校をどう考えるかは日本の近代史の大きな問題だと思いますけどね。今も何か旧制高校を考える会とかなんていうのがあって，中曽根（康弘）あたりを奉って何か復活運動なんかをやってるグループがあるらしいんですけど…。

―旧制高校のイメージとして，先生と同世代の北杜夫なんかが書いたものを読んでいると，極めて自由主義。軍人なんか馬鹿にしてるし，規則なんか壊して俺たちが作る，という自主の精神みたいなものがすごくあって，良かったっていう感じがしますけど。

ただ，一番大きな問題は徹底したエリート教育だったということでしょうね。そして何ていうかな，そのエリートたちがいかにも指導者意識っていいましょうか，愚民観みたいなものを共有していたことも否定できないと思いますね。愚民観とその，例えば私が高等学校に入っていろんな本を読んだ中で面白かった一つに芥川（龍之介）の「侏儒の言葉」があるんですけどね。あんなのは中学生で読んでた人もかなりあったと思うけど，私は知らなくって，で，なんか「軍人は馬鹿である。素面で酔いもしなくって勲章なんてものをぶら下げてどうして街を歩けるんだろうか。」なんていうのがありますわねえ。あんなので，ああ，面白いなあって，やっぱり軍人ではあった，反感みたいなのはちょっとあったもんですからねえ，そういうところが軍人に対する軽蔑観と，だけど，愚民観とやっぱ一面で結びついてたと思いますねえ。難しいですね，あれ，どう考えたらいいか。

何か「旧制高校を復活させる会」かなんかのあれで見たのかしら，最近のこう思い出話のなかで，高等学校の先生が生徒に向かって師範学校に入った同級生と一緒に遊んだりしてるのを叱った，なんて話があって，師範の生徒と君らとは人種が違う，みたいな叱り方したってのありましてねえ，そういう雰囲気だったと思いますね。それから，明治時代の作家の思い出話なんかでちょいちょい，

田舎の家に友だち呼んできて楽しく遊ぶ，みたいな話がありますでしょう。あれ，ロシアのツルゲーネフかトルストイか何かみたいなのをモデルにして書いたような文章あるんですけど，その雰囲気，やっぱりあったと思いますね。つまり農村から出てきてる人はだいたい土地の名望家で大地主で，そして家の周りの百姓たちは全部，家の小作人である，といったようなそういうところに友だち呼んできて，何かちょっと畑の物を取ったりしても，ああ，あれはウチの百姓だからいいんだ，って，そんな空気ですね。それ，あったんだと思いますねえ。そういう田舎の地主さんとそれから都市の高級サラリーマンみたいな，それが混じって，まさに良いところのお坊ちゃんが独善的な，独善的な中で自由とか自治とかいって，それが実際にはやっぱ戦時体制のなかで自由とか自治とかいうのが，現実には崩されてきてる，そうやってるなかで，まあ，それを擁護しようみたいな空気がまだ残ってるという時期ですね。

もう一つ，これが分からない問題になるんですけど，あの高等学校に入った初めの頃はですね，文学青年，哲学青年が，文系ではね，主流を占めている時代なんですよね。みんな，いっぱしの文学青年，哲学青年になったような。ところが文学部に行く（進学する）って人は少数です，私の時代だけじゃなくて，既に。あの文学青年，哲学青年がある時期に突然，変身しちゃって，その国家の官僚を目指しちゃう，という，そういう変化があの頃どういうふうに説明されていたのか，よく分かりませんねえ。ただその高級官僚になっていった連中が，ある時期，哲学青年であったとか，文学青年であったということを，残していることが強みになっている面はあると思いますけどね。現在の高級官僚や政治家にそれが欠けてるという言い方で，旧制高校を擁護する議論があるように思いますけどね。でもそこがどうしてあんなにきれいに転換できたんだろう，っていう感じはありますね。

―ある時期のはしか，みたいな。隔離施設みたいな意味合いですね。

そうですね。それは案外旧制高校の先生の中にもねえ，そこを意識されている方があったような気がしますね，旧制高校の先生っていうのは。今の大学教師，（旧制）大学教授に対してはちょっと引け目を持ってたのかなあ。大学より高等学校の先生の方が低く見られていた，は，したけれど，大学の先生よりかもっとやっぱり，のびのびと一緒になって青春を楽しむっていいましょうか，文学や哲学に遊ぶっていいましょうか，そういう雰囲気だったんでしょうか。そして学生が法科や経済へみんな向かっちゃうことへの不満っていいましょうか，つまり高等学校の先生はだいたい，友だちはその官僚として高等学校の教授よりか勲章なんかでいうと上になるような人があったんで，それと自分は生き方が違うんだぞっていうプライド―負け惜しみのプライドかもしれませんけど―，あったりしたのかもしれないと思いますね。それから何かその，やたら文学青年に冷や水さすような，例えばあの英語の教師で，今から思うと非常に出来た人なんですけど，あのちょっと性格破綻者みたいなところがあった，いかにも文学青年がそのまま大人になったみたいな英語の教師がいまして，彼は何か，「文学やるんだったら，ギリシャ・ローマ神話とあの聖書とをしっかり身につけなくちゃいかん」となんてことを，しょっちゅう言ってましてね。それは文学なんか，そんなことやるんじゃ，文学なんか，やれないなあって雰囲気が学生のあったような気がしましたけど。

で，学生が先生をかなり評価してましたからね。「あれはくだらん。」とか「あれはすごい」とか。ただ，あれですね，日本史の教師でね，玉泉さんという方がいたんですよ。この方は後になってみ

ると偉い先生だったと思うんだけど，あの頃，あんまりやってなかった経済史をやられた方で，中世経済史をやられた方で，室町時代に年貢が貨幣納にどれくらいなったか，なんてことを細かくやってらして，それから考古学なんかもやってらして，資料いっぱい集めた記念館みたいのを作られてた方なんですけど，その先生の講義はものすごく面白くなくって，事細かな事実を丹念にしゃべられるんで，それも平板な話し方でね。あれはつまらないよ，って言われて，こっちも先輩がつまらないよって言われて，つまらないような気がしちゃって，何にも教わらなかったのは残念なような気がしますけど。なかには少数，ごく例外的だと思いますけど，そういう方にくっついていってそのまま，しっかりした研究者になられた方もいらしゃるんですけど。その意味でも私はちょっと駄目でしたね。

―他に先生で印象に残られているような方は。

ああ，それはいろいろいますけどね。西洋史が非常に新鮮でしたね。今来陸郎さん。この人にちょっと，こう，お人柄としてはまずいところがあったんですけど，ええ，これはしょうがないんですけど，戦争中に工場に行って，一緒に監督官としてついていきますわね。食べ物がみんな，ない時代で，学生の中でも食べ物の奪い合いみたいのがあったんですけど，それに自ら学生の食べ物を取っちゃうみたいなところがあったりしましてね。これはまあ今からいうと，そんなこと覚えてるのが悪いことのような気がしますけど，でも出来る人でしたね。

それから，私のあれから言うと，さっきのハ類ですけども，読書傾向から言うとロ類に入るのが自然だったような気がしますけど，今から思うとやっぱりハ類に入ってよかったと思いますけどね。それはドイツ語なんかの，ドイツ語なんかも高等学校出てからほとんどやってないもんですから，すっかり忘れてますけど，一応，私，高等学校ではドイツ語の専攻に入ってたんです。そこの方が先輩にそれこそ文学青年，哲学青年，いっぱいいたし，面白かったんですけど，その時，古典の方では穴山さんって言ったかな，何か，人柄を言うといかにも女性的な，後になって折口（信夫）さんのことを本で読んで，折口さんに似てるのかなって思ったんですけど，なんか，なよなよした感じの人だったけど，非常に，国文学のセンスはあった方のように思いましたね。その方のところに読書会みたいなのに一緒に行って『伊勢物語』か何かの講読を受けたんだなあ。高等学校の生徒で勉強好きな人は，先生の方もそうですけど授業以外で，好きな人を勤務時間以外に周りに集めて一緒に本読むなんてことをやってて，中にはドイツ語の文献か何かを読んでた仲間もあったようですが，あっ，そっちもちょっと入ったか，今来さんを囲んでブルクハルトか何かを読んでるグループがあって，ちょっと加わったことがありましたっけねえ。それよりか穴山さんを囲んで『伊勢物語』か何か読んだ方が，勉強になったような気が，私が好きだったのかな。ブルクハルトも面白かった，と思ったこともありましたけど，戦後ですね，それは。

穴山さんも何か，柳田国男との関係は今来さんを通してのことを申し上げた（「『木綿以前の事』への思い」石井進編『歴史家の読書案内』，1998 年，参照）けど，穴山さんも柳田国男を何かふれてましたよ。「柳田国男，面白かったけど，ある時期全部売っちゃった。」なんて言ってましたね。すごい本を持ってるんだなあって思ったら，ちょっと何か柳田国男が話題になったら，あれは，ある時期は面白かったけど，何かで，何で悪いこと言ったのかな，全部売り払っちゃったなんてこと言ってた覚えがあります。

ただ，右翼が伸びてきた雰囲気はありましてね。特にこれは学校によってずいぶん違いがあったらしいですね。佐賀高校，九州の高校では五高ってのが九州で一番（古い）ナンバースクールを以て任じてたし，出来る人は五高の方を選んだんでしょうね。五高がちょっと別格で，あと，その次に位置するところで，八高ってのが鹿児島にありましたけど，佐賀と福岡がいつも何か並んでいるような感じがあったんですけど，その佐賀が右翼の拠点でしてね。平田俊春っていう，忠実な平泉澄の門下生が先生になってて，平田さんの影響じゃない，そういう雰囲気のなかで平田さんが赴任したのかもしれませんけど，佐賀高校から右翼のオルグみたいのがちょいちょいやって来てたなんて話を聞きましたけども。ちょっとそれ，拒否してたような感じでしたね，福岡の場合は。でもそれ乗る人もあったのかなあ。でも，右翼的なムードはそんなにはなかったですね，私の感じではね。だいたいやっぱり工場に行ったりなんかして，短い期間ですから，学校にいたのは。

話したくないんじゃなくて，本当にうまく整理できませんね。区分で言うと3ヶ月，学校へ行き，それから9ヶ月くらい工場へ行って，3ヶ月くらい，また学校へちょっと行って，それからもう敗戦後の時代ですからね。

―授業もそうなると細切れになってしまいますね。

やっぱり，ねえ，最初の二,三ヶ月はまともだったけど，まともだったと思いますよ。

工場への動員

―急に，（動員などの戦時体制になる）ということでしょうか。それとも頭の上ではそういうことはあり得るという感じだったのでしょうか。

それはそうですね。それから福岡で，じゃなくって兵隊に行くのがぽつんぽつん出てましたし，学校の方でも文科の学生は途中で兵隊に行くの（可能性）があるってことを十分考えに入れてたようですね。何て言ったらいいでしょうね，やっぱり昔のありし良き高等学校時代ってのが，かえって私より一年下の北杜夫ぐらいだと強調されているような気がしますけど。私などやっぱり，それが崩れていってる，右翼が入ってくる，それから教練がどんどん拡張されていったし，あの，講義さぼって寮で寝転がってるみたいなのを抑える空気は強まっていきましたしね。それからあの，寮雨だとか，ストームだとか，そんなものもだんだん抑えられていきましたし，抑えられていくのに対する反発として，あれよくやってくれたと思うけど，上級生が，何年か前，一年前にはおおっぴらにやってたらしいんですけど，夜，どっか，福岡のはずれの海岸にテント張って，そこでお酒飲んで，ランブ（乱舞？）っていうみんなで歌,歌って踊ったりして,寮歌歌ったりしてっていうのをやってた。それを禁止されてやめになっちゃったんですけど，私たちの文科の寮の先輩が，あのそれを非合法に決行しましてね。夜中に塀を乗り越えて，そこまで行って，そこで太鼓叩いてやってたら，土地の青年団か何かから叱られましてね。それで学校の方に通報されて，あと，1年生はあまり叱られなかったんだな。要するに上級生の言うとおりにやった，ということで。上級生はずいぶん叱られたらしいんですけど，よくそれ，やってくれたと思いますけどね，今から思うと。そういうの抑えられていって，やっぱり軍事教練が強まっていくっていう，旧制高校の末路になった。それから工場に行って戻ってきたら今度は，僅かで，また，ちょっと工場へ行って敗戦っていうことですから。それから敗戦後は本当に飢えとの戦いでしたからね。食い物に追い回されていると，エリートのプ

ライドもどこへやら，みたいな雰囲気になっちゃって，まあ旧制高校の末路を経験しているのが我々で，次の学年の北杜夫くらいのところは末路の中から，まあしかし，昔をちょっと復活したような動きが僅かに出てきたところで，北杜夫が非常に美化してるんじゃないかなって気がしますけど。

―そういう中で，今来先生に教わるというかたちで，柳田国男の『木綿以前の事』に出逢われたわけですね。寮に宿直に来られる先生方から，ということですね。

あれは楽しかったですね。先生の方もそのつもり（で待っている）。先生によっては誰も来ない先生もあったかもしれませんけど（笑）。特に教練の先生なんか来ると誰も行かなかったと思いますけどね。一応，点呼がありましてね。点呼は何時だったかな，10時かなんか。で，宿直の先生は各寮を回って，軍隊式に（点呼をとる）。それまでの間かな。それから後までやってたこともあるかなあ。先生によっては学校当局の方針とは違って，夜中までおつきあいされた方があったでしょうかねえ，私はあんまりそんな記憶ないですけど。ああ，一遍，教練の先生からえらい絞られて夜中までしゃべったことがありましたけど，それはお説教であって，お説教と反論であって，今来さん（と話したこと）とは違うんですから，先生によっては夜中までやった人があるかもしれないし，それからさっき言いましたように，何か先生の家に行って読書会やるみたいなことは…。夜中までやった人があるかもしれない，もしかするとねえ。

― 一晩中，語り明かすということではないんですね。

あの，寮生仲間ではあったと思います。私も経験しましたね。夜中まで，点呼の後まで，それこそ人生を語り合ったりしたっていうのは寮生仲間ではよく聞く。先生が絡んで，というのはそれは私の見聞の中ではなかったですねえ。あり得たことだと思いますけど。

学校の図書館の他にも寮にも図書館がありまして，（『木綿以前の事』の場合は）話をうかがってすぐ（借りて）読んだと思いますね。そして「面白い」と思ったと思います。それからあの頃はね，出版界で言いますと意外に民俗学の本は出てたんですね。それで，要するに戦争を謳歌するような本以外で，あの本屋に出てる本っていうと案外，民俗学の本があったんですね。意外な本を読んでます，それで。高校生が誰でも読め，と言われて読むような，その倉田百三だとか阿部次郎とか西田幾多郎とか，いう以外で読んだ本としては倉田一郎とか橋浦泰雄とか，そういう人の本を案外読んでましたね。それから中山太郎…そんなのを読んだのは私のちょっと変わったところだったでしょうね。柳田国男の本はどうですかねえ，本屋にあったんでしょうかねえ。だいたい創元選書なんていうのは学校の図書館で見たような気がします。

柳田国男はね，穴山さんの場合はね，確かあの日本文学史みたいな講義やってて，『古事記』の太安万侶が男性か女性かの議論みたいな，そんあ話のなかで柳田国男のことをちょっとふれてられて，それで聞いたような気がしますね。そういう柳田国男ファンって言いましょうか，読者っていうのは国文学の方からの人が案外あったでしょうかね，もしかするとね。

それからもう一つはあれですね，大東亜共栄圏ですよね。大東亜共栄圏に乗って東洋史の，―東洋史って中国史ですけど―教官が，リードして興亜研究会ってのをやってたのかな，それの興亜研究会の名前で買った本が寮にありましてね。「マレー半島の何とか」，とか「インドネシアの人文と地理」だとか，そんな類の本ですね。そんな本をいくらかちょっとのぞいてみてたりしてたのが，後になってみると，本当はあれ，面白かったんだなあって気がする。その時はどのくらい読んだか

分かりませんけど。それどころじゃなくなってすぐ工場に行っちゃいますから。ちょっとですけどね。でもちょっとの間によくいろんな本を読んだと思いますよ。西田幾多郎も読みましたし，…

―いわゆる高校生的な，高校生が通過する教養みたいなものに対してはいかがでした。

やっぱりショックを受けましたね。人間の生き方を考えるみたいなことを初めて経験するんでしょうかね。読書ってのは人間の生き方を考えるものだってなこと考えるんでしょうか。

ただあの頃にね，案外よく読まれていて，今忘れられている本がずいぶんありますね。例えば，これは私，読んでないんですけど『太田伍長の戦中日記』なんていう本がずいぶん，読まれたんですねえ。これは私読んでないんですけど，最近，澤地久枝さんのものをみてて―澤地久枝さんはああいうことをよくおやりになるんで―太田伍長の奥さんのインタビューか何かをやってて，ちょっと面白く読んだんですけど。太田伍長って，御存じ？あのね，学徒兵として戦死した若い男に過ぎないんですけど，渋沢敬三のところにいたのかな。で，完全に一兵卒として戦場に出ていって，そして非常に勇敢な兵士であって，戦死したっていうんで一時，あの新聞でも大きく取り上げられて，その時に小林秀雄かなにかそういうタイプの文芸の世界で，世界の3人の，日本で3人の有名な伍長，分かりますか？ヒットラーとのらくろと太田って。

あ，そう言えば，『麦と兵隊』とかあんなシリーズは中学の時，読んだような気がしますね。それから太田伍長と並ぶような本として，今忘れられている本に，何ていいましたかね，『ある哲学徒の手記』って言ったかな。あれは機雷かなにかに触れて船で死んだんでしょうかね。それなんか私も読みましたね，一応ね。そんなのはある程度，人生の生き方考えるっていうのと，自分は戦争で死ぬかもしれない，それにどう気持を整えるかっていうのと重なり合って，高校生の新しい―つまり倉田百三とか西田幾多郎とは違う―高校生が普通に読む本になっていったのかもしれませんね。

思想の形成，そして自立

―通過儀礼的な読書，そして人格形成にもつながる読書のなかで，民俗学の本はどういう位置づけになるんでしょうか。

わからないですねえ。もう一つはねえ，もう一つ私の読書傾向として児童文学っていいましょうか，童話みたいなもの，それ好きだった。それは小さい弟妹がいて，それを可愛がっていた，っていうかある程度自分が保護者みたいな立場になってた，それに関係するのか，児童文学みたいなものに，ちょっと読書傾向が普通の人と違ってあったような気がします。私の場合，柳田への関心も初めはそれだったような気がしますし，『子ども風土記』みたいな。そこらへんが初めに触れたものですから，柳田に。新聞連載か何かで触れたんじゃないかな。それと子ども向きの本への関心と柳田への関心とが結びついて初めは持っていて，そのうち，戦争で死ぬのに自分の心を整えていく，そこにもそれがつながったような気がしますね。天皇陛下のために死ぬっていう建前だけど，その建前をそのままずうっと信じることはさすがに出来なかった。そうすると何のために死ぬかってことで，町ん中で見える子どもたちみたいのを見て，ああいう連中のために俺，死ぬんなら，死んでもいいや，みたいな，そんな感じになっていったんじゃないかっていう，これはどっかに書いたかしら，学生で戦場に行く人がだいたい『万葉集』は持ってた。『万葉集』はまた軍隊でも目をつぶっ

ていた。それで何か自分の死を納得させようとしたっていう，これはまあ，よく知られたっていうか，周知の事実だと思うんですけど，その『万葉集』にあたるものとして，何か児童文学みたいなものと柳田とがあったのが私かなって気がします。

―それは意外というか，予想もつかなかったお話ですねえ。

こないだ，岩田重則さんの本で，あの柳田の『先祖の話』，あれの原形がそれ以前の著作に充分あるってことを論証されてましたけど，よく分かったんで，『先祖の話』は，これはいいんでしょうね，やっぱりあの戦場で気持ちよく死ぬために，人を動員した本になってる。それは私の実感と合ってるような気がしますけど。

―児童文学について具体的な作品，作者では，どういったものを。

これは戦後になるんでしょうかねえ，宮沢賢治を愛読してたことがありましたね。工場動員の中でか，戦後じゃないかなあ。宮沢賢治，人があんまりあれこれ言う前に，面白いと思ってましたね。その頃，いくらか（本が）出てましたね。

―賢治童話の世界には割とシンパシーがあるわけですか。

そうですね。それは工場動員前じゃないですね，後でしょうね，あれは。つまり戦後でしょうね。

―食うや食わずの現実のなかで，片方，頭はそういう世界にいってるわけですね。

そうですね。その間に工場動員なんかあって，工場動員ではいろんなことを我慢させられていた。たぶんそれが自分のなかでは整理されてないんですけど，あの，どういうふうに言ったらいいかなあ，学生と工場労働者との関係について学校当局，会社両方がかなり神経質に目をつけてたようですね。対立するとみた人もあるし，場合によると学生の中で左翼系の思想をもって労働者を煽動するようになりはしないか，というふうな目でみているところもあったと思います。後からみるとその可能性，絶無じゃなかった，私の学年でもね。上の学年だったらもっと現実的だったと思いますね。私はそんなあれなかったんですけど，でも，前者の方，工員との対立みたいな面，それはかなり厳しく出たっていうところはありましたね。何か，学生はあまり仕事しない，とかいう空気があったり，それから仕事をするしないは別として，ドラム缶みたいなもので石炭を燃やして暖房をとってたんですけど，この石炭を足りなくなると労働者がどっかから運んできて入れる，そういう仕事を学生はさっぱりやらない，っていうような苦情が出たことがあったりしまして，これはちょっとお客さんで働いているなんていうふうに見られていた，またそう見られて当然みたいな動きをしていた。一方では感心なことに工場で働いてもやっぱり本は読むんだっていうんで，いつも油まみれの作業服のなかに文庫本か何か入れてちょっと…ああ，よくあったんです，材料が途切れてヒマになるっていう時間ですね。そういうヒマな時間に鉄材か何かの上に腰かけて暗い明かりでそれ読んでるみたいな，それが生意気な，我々と違うんだっていう目で見られるっていうことをあまり気にはしなかったところもあったようですけどね。

それから女学校の生徒が何かやっぱり動員されて，それと男女の関係をチェックするようなそんなこともあったようです。これは私知らないところであったのかもしれませんが，全然なかったですねえ。同じ工場のなかで違う部署ではあったけれども，何か，工場労働者からいろんなエロ話なんかは聞いたりしましたね。で，あの女学生じゃなくって戦争未亡人っていうか，亭主を兵隊にとられて働いてるおばさんたちのなかでいろいろ誘惑するのがあるっていうような話を労働者は面白

がってしてた。それを聞かされたりしてましたけど。

―実際にはなかった。

なかったんでしょうね。もしかするとあった人があるかもしれませんけど。高等学校の生徒自身も中で結構猥談なんかしてたんですけど，そういうところで女の子と仲良くなったようなそんな空気はなかったような気がしますね。性欲みたいなもの―ああ，これはこういう一人の人間の回想録みたいなものではそこのところが大きい筈ですけど，それは中学校の時もすっぽぬかしていきましたが―何か，性欲ってのは少し，余裕がないと生まれないんじゃないかな。

―まず，食欲が満たされないと生まれないんじゃないでしょうか。

ええ，腹減らして重労働やってると，あんまりなかったんじゃないかなあ。いや猥談を楽しんだりっていうのはよくありましたし，なかにはもう女を知ってるみたいな，あれでしゃべってるようなのもいましたけど，それだけのことのような気がしますねえ。

何か文学っていうのにふれるのが，高等学校に入ってからの読書の始まりで，文学の中にやたら性の話出てくるんだけど，それを何か，性欲と恋愛は別なんだといったように何か，恋愛を高きにおく，そういうのが高等学校の雰囲気ですからね。

―先生御自身，中学，高校での恋愛は。

そうですねえ，言ってみれば，前に言いました小学校でその東京の小学校で，男女共通の学科だった時，その時は私の一番学校時代に成績が良かった時で級長になったのはその時だけだったと思いますけど，その時，私と並ぶくらい出来たのが女の子３人で，その女の子の中の一人が好きだったっていうのはありましたけど，それはそれだけのことで，中学校の時はなったら何か，あれはどういったらいいのかな，女の子と一緒に兄弟であっても女の子と一緒に歩いていると上級生から翌日殴られるみたいな，ですから，特に私の場合，うんと年下の妹がいましたけど，あとは母親以外の女性と口をきく機会もなかったような，完全に隔離された（感じ）。附属小学校の時―当仁小学校はもう６年生で，男女別クラスだったし，１年しかいないんで当仁小学校の時の同級の女性っていうのは知りませんが―附属小学校の時は１年から３年まで男女一緒でしたから，附属小学校の同級生だった女の子っていうのはいくらか今も知ってるんですけど，そういうのが中学に入ってどこか福岡の女学校へ行ってて道でばったり会ったりしてもお互いにそっぽ向いていくような，見ちゃいけないもの見たような，そんな雰囲気でしたね。

だからそういう女性観とか，女性を神様みたいなものとして見る見方を恋愛至上主義みたいなところでちょっと残しながら，一面では徹底した女性蔑視っていいましょうかね，それやっぱり旧制高校の雰囲気じゃないんでしょうかねえ。

―そうすると旧制高校でいう，人生とか真理っていうのは女性の問題っていうのはあまり入ってこないんでしょうか。

恋愛とはなんぞや，みたいのはよくやるんですけど，そういうのとそれからなんかどっかの食堂のメッチェン（女性）がどうこうとかいう話と全く別の次元の話みたいだったんじゃないかなあ。時にあれですよ，先輩で兵隊に入ってた人が寮に遊びに来て，戦場の話するみたいなことがあって，それの中に中国の女性を強姦したみたいな話がちらっと出ることがあっても，別にみんな反感もなしに聞いてたような気がしますねえ。ですから，女性を完全に人間と見ないような見方だったでしょ

うね，あれは。

―動員先は具体的には。

高等学校の文科の我々の学年はまとまって，神戸製綱門司工場。理科の生徒は全然違う工場に行ってましたね。

―それで工員，女学校生徒との関係が危惧されたりするんですね。

高等学校はあまり。女学校当局が意識したのかもしれないなあ，あまり（我々は）意識してません。ただ，理科の人でも上の学年では同じ工場に来ていた人があったようだなあ。理科の人の場合，ある程度，理科の教育を活かすような職場にやったところがあるみたいです。

―文科はとにかく労働力。

そうですね，それしかない。

―福高の文科は門司工場に動員ということですね。

といっても 30 人ちょっと欠けたくらいですね。大したことじゃないんですけど。ただあとで聞きますと，あのどっかの高校では工場動員先に本を持って行ってて，（つまり）学校の図書館（の本）を持っていって読んだり，それから交代でくる宿直の先生が特別講義っていうか，そういうのをやったりしてたのがあるって聞きましたけど，そんなのは我々は残念ながらなかったですね。

―行ったらひたすら働くだけ。

そうですね。ただやっぱり，さっきに宿直室に行ってしゃべるみたいな雰囲気は，ちょっとはあったように思いますけど。工場に先生替わりばんこに，一週間ずつ，監督に…。

―そういう時に労働と関係ない話をするわけですね。

そういうのはあったような気がしますね。

ですから，休みの日ですとか，あと夜勤がありましたから，夜勤明けの昼間とかいうのが，あの，門司をはじめとして，あちこちの古本屋を回ったりしてまして，あの頃は貸本屋ってのがあったんですね。貸本屋が事実上，保証金で，案外売ってるみたいね，そんなのから，俺は何か良いのを手に入れたぞ，みたいな空気ありましたね。中には労働者の服着て本を借りようとすると，「これはあなた方読むような本ではありません」て断られるってことが（ありました）。学生が，ってことじゃなくて。

―それはどういうことですか。

普通の労働者が読む本は，せいぜい吉川英治。それで本屋の親父は少し，本慣れしていて，…

―客を選ぶみたいなとこがあって，ということですね。

あなた方が読むような本じゃありません，なんて言われて，からかったことがあります。

―俺は高等学校の生徒だ，なんて。

そういうことは言わないけど。そんな空気の中で，変な本を，やっぱり買ってきちゃ読んだりしてましたね。ほんと，変な本でした。依然としてね。

―西田幾多郎とか，そのあたり？

そういう本はあんまりなかったでしょうね。岩波文庫がまだ珍しくって。岩波文庫で特殊な本が出てるんですね。あのたとえば，『海国兵談』なんていうの，そういう中で買ったの，今でも家に持ってます。どうしてあんなの読んだのか，わかりませんけどね。今読んでも面白い本ですけどね，あれ。

―まあ，後に結びつけるのはいけないんで，その時は乱読されていた中のたまたまの一冊というくらいで。

そうですね。

―だいたい文庫本くらいですね，工場に動員されているときは。

そうですね。

―毎日，工場へ寮から出勤するというかたち。夜勤もあって，夜勤明けはそうやって，自分の知的欲求を満たそうとする，といった生活ですね。そうすると高校生活というのは工場（への動員）というのに比重があるんですね。

八月一五日前はそうですね。八一五以後はそうじゃないんですけど，

―敗戦までは工場への動員が重くて，あとは寮生活，寮の自治の香りはまだ残しつつ，まあそれでも空襲があったりして自分たちの生活の場を守る一方で，知的刺激には開いていった，という，そういう無理矢理な総括ですがよろしいでしょうか。

ただね，これも後から考えたことですけど，そういう高等学校の生活っていうのはある意味では，社会から切り離されていて，特に日本の敗戦近し，みたいな実感は案外薄かったんじゃないか，って気がしますねえ。普通のうちにいる人に比べても薄かったんじゃないか，って気がします。と言っても，工場にいる間にもずいぶん，あの戦争を実感できることはあったんですけど。空襲は味わってなかったけども。東京は空襲を受けてきたなんていうニュースが入ってくるくらいで。ですけども門司の港で，兵隊が訓練してる。訓練してるってのはどこかに連れていかれる兵隊が潜水艦に遭った時避難する訓練やってる場面なんか直面しましたしね。それから何か中国人や韓国人を引き連れて移動する人があったりしましてね。何かずいぶん厳しい世界に接してはいるんですけど。それから寮の食事はもちろん，非常にひどいものだったけど，だけど普通の家庭で何も買えなくなった，どこどこの家はみんな戦災で焼けちゃった，とかいうのが，びんびん入ってくるようなそうんな雰囲気じゃないからねえ。さらにその，工場からいっぺん引き上げてきて，寮で空襲を受けた前後になると，もう市民の間にはかなり戦争は負けるっていう実感ができたんじゃないかなあ。にもかかわらずやっぱり寮にいるとまだ何とかなりそうな感覚を持ってたのかなあって気がしますね。特に東京で普通の市民生活送ってた諸君は3月10日の空襲以降はもう敗戦間近って感じをみんな持ってたって気がする，これは聞いてみないとわからない（ことだけども）。

―寮では朝晩の食事が出るわけですね。

ええ，一応出ます。

―お昼は？

何か工場で出たような気がします。ただこれは今想像できないけど，12時間労働ってのが普通でしてね。のみならず，昼勤と夜勤との交代期にはね，18時間労働になるのかな。夜勤から昼勤への交代，昼勤から夜勤への交代とね。あの週によって昼勤と夜勤と分かれまして交代の時期は18時間（労働）じゃなかったかな。朝出てって，翌日の夜明けくらいに帰って，それからあと夜勤になる。ひどかったですよ，確かにね。で，これは人によって差はありますけど，私はかなり忠実な労働者だったようですね。

―でも体力的には？

不思議なことに身体が弱かったのに，そんななかで何とかなっていったんですね。ちょいちょい聞きます，そういう話はね。あの身体が弱い弱いって言ってたのにそれが戦争中に案外治っちゃって…。

敗戦，そして大学進学

―そういう状況のなかで八月一五日が来るわけですが，敗戦であると，負けたと，いうのはどこでお聞きになったんですか。

それは香椎だったですかね，福岡の東のはずれに飛行機工場があって，そこに７月くらいだったでしょうかね，再度動員になって。それは通勤でしたけど，その工場で聞きましたね。

―終戦の玉音放送は正午でしたね。工場の広場に集まったんですか。

そうでしたね。ただ私は，寮生を，そのクラスのリーダーが配慮してくれて，寮の奴は腹が減ってるから，中に入れるっていうんで，何か事務のそれも炊事班じゃないけど何かちょっと特殊な職場でした。あの，門司の時は旋盤工でしたけど飛行機工場では工場の現場じゃなくって事務部門でした。ですから小人数で聞いたような気がしますね。小人数で女の子が何人かいまして，学生は私一人だったかな。神戸（製鋼）の場合とずいぶん違った労働条件でしたね。

―すぐ敗戦とお分かりになりましたか。あれ（玉音放送）分かんなかったって人が多いですよね。

一応，分かりました。これはねえ…負けたって感じと解放感と，その二つの混じり合いなんでしょうけども，あの建前としては「負けた」で，実感としては心の奥底では解放感っていうところだと思いますけど，心の奥底にある解放感も無理して禁圧してたような感じでしょうかね。

―その直後のことが意外に聞かれていないと思うんですが，その日はそれで学校へ帰るということだったんですか。動員は終わりということになったわけですか。

一応，その時は寮から通ってましたから，その日は今日は仕事なし，で，寮に帰んなさいってことで寮に帰って，「さあどうなるんだろう」って話をちょっと仲間たちとやりましたけど。兵隊にとられないって感じもありましたし，これで，何か日本は終わりだからみんなで寮に火をかけて死のう，なんて発言も本気じゃなかったと思いますけど，ちょっと飛び出るような空気もあり，それから福岡の特殊例としては留学生がいましてね。大東亜共栄圏からの留学生が（日本の）あちこちにいたのを福岡高校に集中したんですね。ある時期に。その連中と交流みたいのがあって，その連中のなかでも，あれははっきり分かれたんですね。タイの学生は非常に戦争協力的で，フィリピンの学生はもう反日的な空気をあまり隠さなかったような感じですね。だからフィリピンの学生は「意外に早かったね」なんてからかったという話を聞いたりしましたけど。

―それは若さの残酷さというか，自由さという感じですねえ。

でもあの頃は学校当局がもう混乱していたと私は思いますけどね。先生の中にも両方あったと思いますね。やっぱりもう少し前から敗戦をすっかり見越してあとのことを考えていた方もあれば，やっぱり何とか戦争はなるだろうって方もあったんじゃないかなと思いますけど。

何かいろんな軍国主義的な本は撤去せよ，みたいな噂が出て，それを焼いた覚えがあります。それからこれも混乱の極みですけどどこかに逃げ出したらいい，というであちこちうろついたこともありましたし，そしてやっぱり飢餓，でしたね。

―戦争中は統制で，でも配給があるから食べられたけど，敗戦後の方が食べられなかったと聞きますけど，それはどうでしたか。

ええ，敗戦後も配給はあるはあるんですよ。配給はあるけどももっと悪くなったでしょうね。

―その飢餓について具体的に教えていただきたいんですけど，寮としては食事は出続けるんですか？閉鎖ですか，寮は？

ですから特別休み，みたいのがある。食料休みみたいのが。

―それは食料がないから休みということですか。

はい。その度に私は困りましたね。困りましたって，今から考えると養父母，―養父は亡くなってますが―養母のとこに行く手があったんですけど，それは思いつかなかった。

―塚本の家は当時，東京？

ですからこれがまことにお恥ずかしいと言うか，奇妙な私のいき方なんですけど，あの，敗戦直後に塚本明籌が死んだってことを聞いたんですね。それでいて当時の日記があるんですけど，それに塚本明籌死す，死去ってだけ書いてるんですね。もうちょっとしてからみんな家に帰れ，なんて言われて，それでほっといたんですね。

―当時，熊沢の家は台湾に行ってたんですよね。

ええ，言い落としましたけど，塚本の家を継ぐのは名前だけだって言いましたけど，学資は貰ってたんですね。学資というか，私の生活費は塚本の家から送ってもらってたんですね。これもまた妙なことで工場動員中に給料は貰ってる。人によっては大変安かったという人もあるけど，私の場合は安かった気がしなくってそれによって，いいから（生活費は）送らなくていい，って言った覚えがあります。塚本の家が何かの残りで暮らしてたんでしょうか，大きな家に住んでたのに高等学校に入った段階で行ったら小さな家に引っ越してちゃいましてね。同じ近くの日暮里なんですけど，お屋敷みたいなとこに住んでたって記憶があるんだけど，戦争末期にはちょっとみじめな家に住んでましてね。何か家計もあんまり良くなかったんじゃないかっていうふうに（思われた）。熊沢の家に比べて塚本の家はお金持ちだってふうに言われてたけど，そんな感じがしますね。そして年寄りで少し何か，こっちが大事にすれば良かったと思う反面，頼りにすれば良かったんでしょうけども，全然名前だけの家なんだっていう意識が強くって本当に変な行動をとりましたね。友達がみんな食料休暇やなんかで休みの時，一人で寮に残ったり，それから寮に残ってたって寮の中では，終戦後すぐじゃなくって時がたつにつれてひどくなるんですね。食料がね。それから卒業する昭和22年頃が一番ひどかったんじゃないでしょうかね。22年くらいになってくるともう，みんな家に帰っては食料を何か持ってきて，それをコツコツ食べて補給している。その補給が私，できなくって友だちにそういうのがあるとそこへ押し掛けていって，分け前をもらったり，それもあんまり何遍も繰り返すとまずいし，嫌がられますから，中には同情してくれてそんなのに呼んでくれることもあったし，しかし，つらかったですね，あれは確かに。ずいぶん恥ずかしいような，食べ物盗み，ほとんど盗みみたいなこともやりましたし，…

―盗みっていうのは畑などから？

ええ，畑もありましたし，これはひどいもんだったんですけど，その頃は。

熱海の，熱海にいたんです，あの親（塚本の家）は塚本明籌死んでからはね。しばらく経ってか

ららしいですけどね。どうしてたのか，熱海に行ったのはいつですかね。すぐじゃなくてちょっと経ってから東京へ行ったんですね。熱海に別荘持ってたんです，塚本明籌がね。そこにいますってことを聞いてそこへ訪ねていったんですね。それ以来，ちょっと塚本ヨシノっていう養母とは少し接触が濃くなったんですけど，やっぱりいかにもよそよそしい態度を私，とっていて。

―そうすると食料事情が悪化するなかで，塚本の家も頼らずに福岡で単身，がんばったわけですね。

そうですねえ。

―で，かなり友だちに助けられたりしながら，飢餓の状態，もう高等学校生活の後半というか，八月一五日以降はそういう飢えとの戦いで高校時代は推移した。

それでいてやっぱり本は読んでますね，案外。戦後の物のない時に案外そこで本が出てくるんですね。出版も流通も，戦後。で，外食っていいましょうか，外でその今のように何とか丼とか何とかラーメンとか言うんじゃないけども，何かちょっと野菜のごった煮みたいなものを丼と箸だけで売ってる店があって，そんなんで（栄養の）補給なんていうのはやってましたけど，それに金使やいいのに，それ減らしてでも本買って読んだりっていうのはやっぱり，やってましたね。不思議なことですけど。そんな中で今でも覚えてるのは，あのトルストイの『戦争と平和』を，こんな厚い本を何か古い版ですけど夢中になって読んだことを覚えてますけど。それからやっぱりその頃じゃないかな，買って読んだ本ですよ，創元選書で，フランス人の書いた民俗学の本，ありますよね，翻訳書ですけど。『民俗学概説』とかいう。

―ああ，山口貞夫さんの訳した，サンティーブの『民俗学概説』（1944 年，創元選書）。

あんなのもその中で読みましたね。不思議ですけどね。

―そういう知的欲求の存在，ちょっと分からないですねえ，僕らからすると。だって飢え死にって可能性もあったわけでしょう？ 身寄りもないわけでしょう，極端に言えば。友だちに食べ物をたかったり，泣きついたりして何とか飢えをしのいでいる状態。ある意味でそれを拒否されれば，もう凄いことになりますよね。それでも本を買う。不思議ですねえ。

まあ，飢え死にというか，栄養失調っていうの（可能性は）あったですねえ。体重はどんどん減ってたし，…

―結核の前歴もあったし。

結核の前歴はどうしてか消えちゃったような気がしますね。親から離れてからそういうの自分で消しちゃったのかな。そこらへんが不思議ですけど，嘘言ってるわけじゃないんです。ただ，一面では日本はいったいどうなっていくのか，そういった問題を先生も含めてみんなあれこれ言ってまして，その中で何かちょっとはモノを考えてはいたようですけどね。何考えてのかなあ，あの頃。

―授業はもう再開されてたんでしょうか。

ええ，これはもうひどいなかですけど，やってましたね。そしてあのいろんなところから学生が入ってきまして。

―旧制高校の 2 年生で敗戦。で，翌年 4 月に 3 年生になっている。そこに新入生が入って来る。

いや，2 年生の時，1 年生はいましたね。1 年生はたぶん，中学の時に工場に行っていて，入学式だけやってまた工場へ行く，という。その連中が我々の授業が始まると同時に寮に入ってきましたね。ですから私も一応，寮で下級生を相手にしたことはあるんです。そういう中に新田英治君，今，

どこだろう，史料編纂所に長くいた，中世史の経済史の。それから犬丸，共産党の論客。そんなのがいたですね。

それから陸軍や海軍の学校の人，皇学館の人，それから理科からの転科生，理科からの転科生は案外多かったんですねえ。

―もう文科の縮小はナシになって，元に復するということですか。

戦前の状態には復してないですね。3組あったんですから。2組になったんですね。イロハ含めて1組だったのが2組になって，これはロとハが合併して一組みでしょうかね。文甲というかたちでイが独立して一組みなるのかな。ただよそから入ってきた転入生は1組に一番多かったのかな。これがまたいろいろでしてね，外から来た人でも。語学なんかは海軍兵学校の人の方が出来たんじゃないかな，もしかすると。高等学校は（入学式から）3ヶ月で工場行ったりしてる間に軍の学校はずっと授業続けてたのね。しかも海軍兵学校は後で聞きますと，戦後のことを考えて偉い校長がいて，戦後に人材を確保するというんで，ずいぶん学科をよくやってたそうですねえ。だから語学は案外，旧制高校の生徒よりできる人がいたり。ただ差のあった人もいましたね，力に。

前に高等学校の思い出話を書いた文集がこの頃，出来てるんです，私が寮の火災のことを書いたのと同じ号。それ見ていますと何か，そういうのを拒否しようという動きもあって，我々の学年のリーダーだった奴は「やっぱり，同じ若者なんだから受け入れようじゃないか」なんて話をしてまして，それは立派だったと思うんですけど，ただ拒否しようという動きがあったことも確かですね。でまた，あのマッカーサー司令部の方でもあんまりかたまって採っちゃいけないっていう制約もあったそうですね。あの兵学校や士官学校を卒業していると大学に入ったのかな。途中の人が高校に入ったのかな。我々と同期，同学年で陸士や海兵に行った人で高等学校を経ないで旧大（旧制の大学）に入った人がありますし，高等学校に入ってきた人もありました。

―急に学生の数が増えて，勉強しようとする人が増えていくわけですね。高等学校から大学へは全入ですよね，基本的には。

辻達也さんなんかは私どもの大学（東大）で，2年先輩かな。彼がいつか言ったことに「君らの学年は偉いよ，入学試験受けて入ったからな」って。

―？

いや，つまり東大に入学試験受けて入ったのが我々の学年で，辻達也さんは入学試験受けないで入った，と言うんです。我々の世代は入学試験を突破して入った，と，冷やかしですけど。確かに私の時は入学試験を受けて，ちょっと倍率があったんです。どうしてかっていうと軍の学校から大学に志願した人がかなりあったから。やっぱり高等学校の方が学力高かったんでしょう。だから辻先生の言葉はあんまりそのままには（受け取れない）。

ただ，東大でも戦前の普通の体制でも法学部なんかはやっぱり落ちてたでしょうし，理科関係でも人気学科は高等学校出てもすぐに入れない人が何人かいたと聞いてます。旧制高校出ても浪人というのはあったと聞いています。でも文学部に関してはほとんどフリーじゃなかったでしょうかねえ。ただ今の学校の制度と考え合わせて東大ってのが今みたいにトップに位置づけられるのは異常だと思いますね。戦前の場合はそうじゃなかったですね。少なくとも，旧帝大っていいましょうか，それは同格みたいな意識がかなり強くあったし，事実，ある程度そうだったんじゃないかと思いま

す。中学で私と同学年で秀才で４年生から高等学校に入ったよく出来る男，これ，東大受ければ当然入ったんでしょうけど，九大に行ってますし，その後も物理学やって名を聞きますし，だから戦後のある時期じゃないでしょうか。九大の先生で立教大学に変わった人があって，そんな風に動くかなって思った，ちょっと意外なような気がしたことがあったんですけど。というのはやっぱり私学ってのを低く見てる。何か東京近辺の方が良いっていう動きが強くって，旧帝大の権威ってのは衰えてるんだなっていう感じがその時しましたけど。今一層そうじゃないでしょうかね。

―入試があったというのは意外でした。

入試はちゃんとあったし，緊張しましたよ。入試はよく出来たと思いますけど。

―科目は何だったんですか。

私がよく出来たと思ってるのは問題の一つに，国文になるんでしょうか，連歌の上の句と下の句をくっつけるみたいのがあって，それはほとんど完璧に出来たという。それはたまたま読んでたからだって，いうことで。それから歴史の問題かな国語の問題かな，国文の問題でしょうねえ，日本の文学史上のいいものを各時代にわたって十挙げろ，かな，なんかそういうのがあったりしました。外国語はありましたね。数学はなかったと思いますけど。

―外国語と国語と，ですね。社会，地理歴史系統の科目はなかったんですね。

でしょうかね。何か法学部受けた人が，自由と平等とは対立するものかどうか，といった問題が出てあれこれ言ってたのを記憶しますし，それから，一八四八年について，っていう論文が出題されたっていうのを聞いて，なるほどと思いました。

―僕は分かりません。

二月革命，ヨーロッパだと二月革命で，日本だとアヘン戦争直後，前後でしょうか。いい問題だと思いますね。そんなふうなかなりちゃんとした入学試験があったんです。ただ，文学部でももしかすると学科によっては，第一志望，第二志望ってのがあってどこかに移されるんじゃなくて，ある学科では落ちるのは落ちるってのがあったのかなあ。何か，心理学は落ちた人があるっていうような話を聞いたような気がします。心理学，ちょっとブームがありましたから。

それから田中小実昌って作家があったでしょ，最近死んだけど。あれ，高等学校の先輩で，猥談の名手だったんですけど―先輩で寮に来ては猥談をしていく―，彼は何か，中文か，インド文学か何か変わった学科なんですよね。あれが何かエッセイか何かで，東大の前をタクシーで通って，運転手さんに「俺，ここに無試験で入ったんだ。」なんて言ったら，運転手が「冗談言っちゃ困りますよ。」なんて言ったって話があるんですけど，あれは本当だと思います。無試験で入ってると思います。中文とか印文とかっていうのは高等学校出てれば，無試験で入れると思います。歴史の場合はちょっとやっぱり落ちる人あったんじゃないかなあ。軍関係の学校や何か大勢受験者が来て，私らの時は明らかに落ちてるんですけど。

ただ，後になってから信州大学へ行ってから，松本高校（旧制）の書類をちょっと見る機会がありまして，それで初めて知ったんですけど，旧制高校，自治とか自由とか言っても，学校当局の学生管理は厳しかったらしいですね。何か，大学への内申書みたいのがありまして，それにはすごいこと書いてありましたよ。家庭の環境みたいなもの（項目）もあったし，いろんなことが書いてありましたね。風采があがらない，なんて文句があったり，そう，左翼思想か何か書いてありました。

何かずいぶん管理されてたんだなっていう…。あれ，ちょいちょいあるんですね。旧制高校出て，帝国大学に入れなくって，早稲田とか何かに行って，という人たちのなかに，左翼運動で，その留置されたような人がよくあるんですけど，そういう人たちを落としたんじゃないかなあ。案外そういう人は優秀な仕事を後でやったりしてるんで，かえって良かったのかもしれませんけど。帝国大学の変な，に入らなくて良かったのかもしれませんけど。

―そこで，文科の中でも国史学という枠で受験したわけですね。歴史学への第一歩ということになるわけですが，歴史学をやろうと，福岡高校から決められたのは，きっかけか何かあったんでしょうか。

そうですねえ，…

―連歌の試験なんかはほぼ出来たし，児童文学なんかにも興味は持ってらしたんですから，国文でもよかったんじゃないですか。

国文じゃなかったのはどうしてでしょうね。私らの高等学校で文学部行ったのは3人でしてね。1人，京都（大学）の哲学行った，これはもういい哲学者になってますけど。もう1人国文行ったのがいまして，これは入ったあとあまりぱっとしなかったんだけど，出来る男だったんですけど，何か…仲良くしてましたけど，性に合わなくってね，その男とは。何か俺はあれとは違うなってのはありましたね。

法科や経済に行くのが嫌いだったっていうのがあり，それから，いくらか建前としては，あの日本はなぜ，こんなことになったんだろう，って，それを歴史科学で解き明かすといったような建前は持ってたように思いますけど，本当にそうだったかどうか，これは大東亜共栄圏なり天皇陛下のために死ぬ，っていうのと同じような建前の論理だけかもしれませんが，何となくそういう感じがあったことはあるでしょうね。そしてそこにやっぱり柳田ファンみたいな，上の方の歴史をやるんじゃなくて，下の方からの歴史がまだこれからだ，といった感じがちょっとあったような気も，今からすれば…。自分をちょっと正当化し過ぎるかなあ。あったかもしれませんし，よくわからないですねえ。

ただ，親父がその高等学校を卒業する直前に帰ってきましてね。それで，文学部受けたいって言ったら，親父は少しぼやいてましたけど，法科へ行け，みたいなことを匂わしましたけど，「決めた。」って言ったあとで，親父も歳とってきてましたから，それ以上言わなかったんですけど。でもやっぱり，建前で言ったのかなあ，こんなふうに戦争に負けた，みじめな日本にどうしてなったかを歴史から見ていくんだっていう，そんな論理だったでしょうかねえ。どれくらいそれが中味持ってたかわかりませんけどね。

―先生はあらゆる時代のことを御存じだし，興味をお持ちですけど，近世史になっていきますよね。大学時代にいろんな先生方とも会われる，先輩後輩とも会われる。最後に大まかな質問をしますが，先生にとって福岡高校から東大の国史学を選ばれたのは正解だったんでしょうか。

それはわからないなあ。でも今から思うと良かった。やっぱり，好きなことをやりながら暮らしに困らないで，この歳まで生きてきたっていうのは，まあ。それから先輩とか先生とかいろんな人に出会えたっていうのは思いますね。ただ，他の出会いだったら，その方がよかったっていうのはあるのかもしれませんけど。

ただあれですね，その後のことを，今やってるような仕事をやるんだったら経済学部へ行って経

済史をやった方がよかったのかなあ，と思ったことはありましたけどね。でも，自分の性にあってないような気がしますね。経済学へ行って経済史やるっていうのは。

―こういう質問は本来，ナンセンスなんですけど，敢えておうかがいしたのは，京都大学の国史もありましたよね，もちろん九州大学もあったし。なぜ，帝大が横並びであったとしたら，なぜ，東京だったのかな，という疑問もあるものですから。

それは東京に親戚があったから，というのが大きいでしょうね。塚本の家も頭に入ってはいましたけども，それ以上に母の（兄の）伯父の世田谷の家，そんなのをアテにしてた。アテにされて向こうは迷惑だったろうけども。

京都（大学）もちょっとは考えたには考えたんです。特に福岡高校で玉泉さんとやっちゃたと同時に，玉泉さんは東大の出かなあ。玉泉さんみたいに，時野谷さんっていう明治維新史やってる若い方が卒業する少し前にいらっしゃって，この方は京大の出の方で，そこに京大ってのはどんなですかって聞きに行ったことがあります。何か，私と東大の同級生で，私より１年くらい年上で，五味（克夫）さんっていう―鹿児島（大学）へ行った―，彼は東大は平泉さんががんばってるからイヤで，京大に入りたかったけど，何だかで京都は行けなくて，東京にした，なんて言ってましたけど。

あんまりきちんと選んで行ったんじゃないですねえ。誰々先生につきたいから選んだ，そういうあれじゃないですねえ。

―平泉澄さんは辞めました（八月一五日で）けど，皇国史観の牙城としての東大とか，文化史の京大とか，そういったそれぞれの学風というか雰囲気について情報があって，ということではない。食糧事情も大きかったんでしょうか。

東京はひどかったけど，ここはもっとひどい，といったようなことでしょうか。大都市以上に中小都市の我が街はひどかったってところはいっぱいあると思いますし，政府の施策もあったんじゃないかな。東京は人口があって何とかしないと外国人が見てるなかで，東京の街のなかであんまりルンペンが多かったら困るみたいな，そんなこともあったんじゃないでしょうかねえ。これは江戸時代からの類推かもしれませんけど，江戸時代でも案外，都市は餓死者を出さない，っていう，飢餓者を出さないような施策がとられてたんじゃないかなあ。

―熊沢の家としては，お父さんも無事，台湾から引き上げてこられて，一家で，ね。寮を引き払って，熊沢の家で荷物をまとめて上京ということだったわけですか。

そうじゃないんです。これも複雑ですけども，親父の部下っていいましょうか，一緒に仕事をしてた方が福岡の西のはずれのほうでちょっとした家があって，そこに家族を置いたまま親父は東京へ職探しに行った。台北大学を追い出されて職がなかった。で，電機学校，今の東京電機大学に職を得て単身赴任，東京に。親父の方が先でしたね（私が上京するよりも）。それで，家族を東京に呼ぼうとしても，東京に家がなくって，また転入もうるさかったでしょう。そんな中で佐倉に住んでたんです。まさにここが戦災者，引揚者寮ってことだったんです。

―佐倉とはそういう御縁があったんですね。戦後の熊沢家はどうなったんでしょうか。

２年くらいしてから，親父が熊本大学へ行って，職にありつきまして，それで初めて熊沢の家は（家族が）揃ったんですね。佐倉の時は本当に兵営の隅で，みんなは入れなくって私も東京で親戚に居候になったり，ちょいちょい時々ここ（佐倉）に泊りに来たりしてたんです，数ヶ月ですね，私が

ここに（いたのは）。それも住んでたわけじゃないなあ，出入りしたのは。

…意識的な嘘はついてないつもりだけど，ずいぶん，何か，それしゃべるならこっちの方がホントだっていうようなことを落としてるようなことはあるような気はしますけど。

―いや，歴史家としての良心が邪魔をしていらっしゃるような気がします。もうちょっとざっくばらんにお話していただいてもいいんですが。史料として残ってしまう，というプレッシャーが若干あるように思います。あとで手を入れていただくという前提ですから大丈夫です。

ああ，そうだ。八一五の少し経ってからですけど，一高の寮ではサイパンが落ちてから日本の解放近しっていうんで万歳を叫んだっていう噂がなんとはなしに流れましたね。こっちは全然そんなこと考えなかった。東京と福岡は違うんだなあってことを(感じました)。それを網野(善彦)に言ったら，いやあんたと同様だよ，なんて言って，彼はやっぱり文科に進むとき，実は易者に見てもらったなんて，それで少し網野に対する劣等感が排除されたかに思ったが，どうもそうじゃないですね。あれはやっぱり，文科へ行っても兵隊行く前に戦争負けてるよ，っていうようなそんな認識じゃなかったのかな，彼の場合。こっちはそうじゃなかったですね，やっぱり。三四郎（夏目漱石の）以来の九州から東京へ出ていくと劣等感感じるっていうのが，その伝説で数倍ふくらみましたね。

網野は一高じゃなくて東京高校ですね。あそこは特別，自由な，というか反戦的な空気があったようですね。

自分のことでも分からないことがいっぱいですね。下手すると本当に歴史家としてじゃなくて，現在の自分を正当化させるような回想になりがちですね。

（2003年5月16日，歴博にて）

註

（1）――『日本歴史』第783号(2013年),「学界消息」(139頁)。なお，塚本の年譜および詳細な著作目録として，塚本良子編『塚本学　著作目録』（2014年，自刊）がある。

（2）――拙稿「言語・伝承・歴史―日本民俗学の個人認識―」（『族』10号，筑波大学民族学研究室，1989年）

（3）――佐藤健二「ライフヒストリー研究の位相」（『社会調査史のリテラシー―方法を読む社会学的想像力―』，2011年，新曜社，初出は1995年），13-41頁

（4）――前山隆「社会人類学における構造と個人」（『個人とエスニシティの文化人類学』，御茶の水書房，2003年），5-36頁）を参照。

（5）――大門正克『語る歴史，聞く歴史―オーラルヒストリーの現場から―』（岩波書店［新書］，2017年），参照。

（6）――旧制高等学校の戦時体制下における外国語専攻の分類については，ややわかりにくいと思われるので，ここでの塚本の談話（と経験）に基づいて，整理しておく。

戦時体制以前	戦時体制
甲（英語）	イ（英語）
	ロ（日本古典）
乙（ドイツ語）	ハ（ドイツ語）
丙（フランス語）	廃止

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2018年11月22日受付，2019年3月28日審査終了）